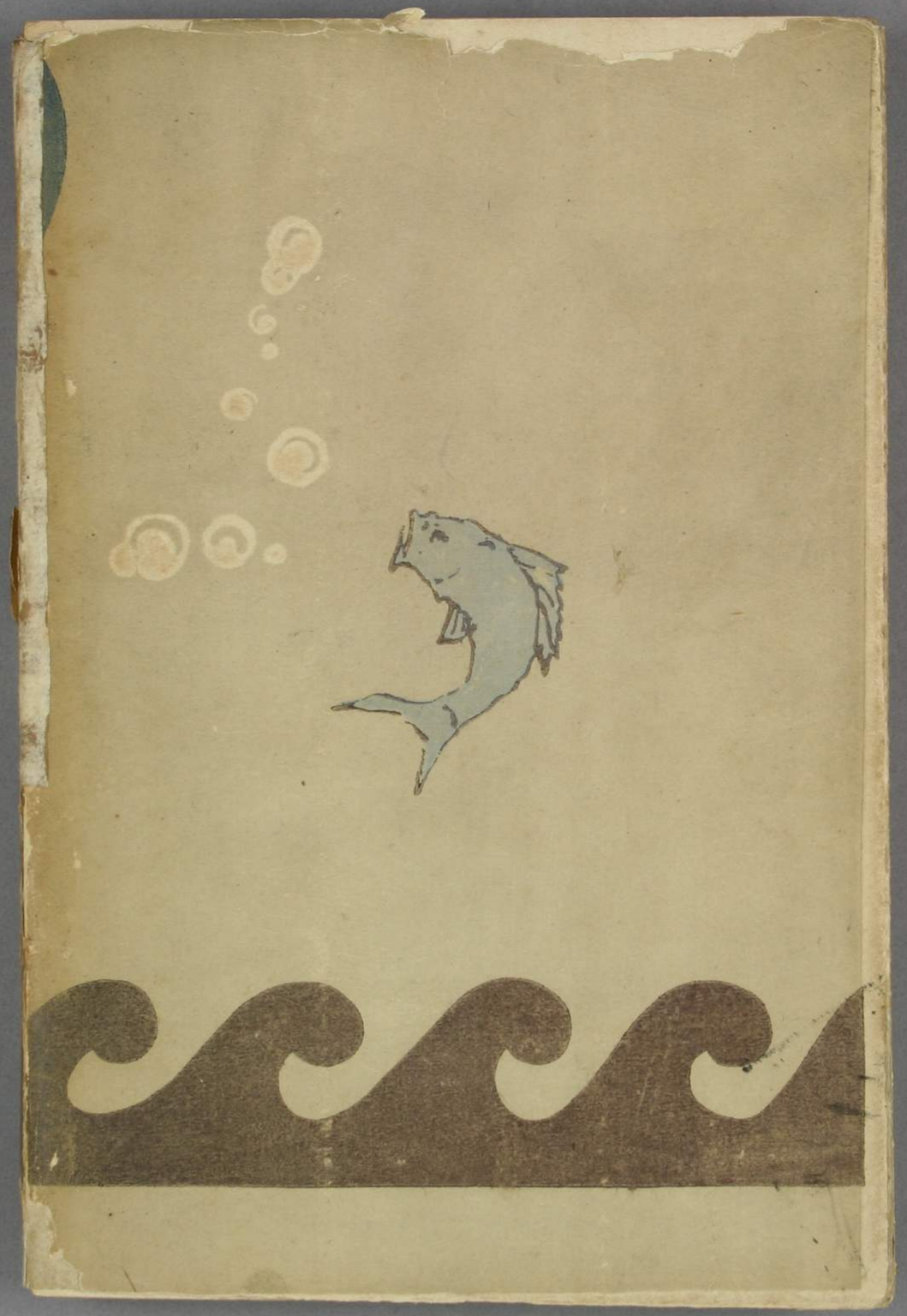
泡鳴詩集



泡鳴詩集

泡鳴詩集

25

泡鳴詩集

泡鳴詩集

はしがき

この集に收めたるは『夕潮』と『悲戀悲歌』となり。前者は明治三十七年、後者は同三十八年の出版にして、各々之を再版するに臨み、一冊に纏むることゝなりたり。兩者、世に出でし當時、諸家の與へたる非難のうち、作者一個の關係のみにあらざる分に對して、乃ち、詩その物の爲めに、些かこゝに辯じ置かんと欲す。

破格の語法を使用すること、これ一なり。詩は、その國在來の語法を美にすると同時に、また、破格の新語法――や

肅とを呈するに至るものなり。例せば、集中の『三界獨白』

がては慣用語と成る――を産み出だすものなれば、一部の人人と同じく、われも亦敢へて之を厭はざる場合あり。こは、雑誌明星記者に與へたるわが『駁信』に於て、答へ置きたるところなり。

八七調(特に四四四三調)は阿呆陀羅經の如くうは調子なりといふ非難、これ二なり。されど、こは、曾て、毎日文壇記者に答へ置きたる如く、之に對する正當の誦法によれば、雄大のうちに激動の餘地を存する格調なり。人、多くはこの調に於て、最後の音脚が他脚よりも一音少き所以を知らず。難者の標準とするところは、八八(乃ち、四四四四)調の

連續にして、こは急誦を要する俗調なれば、最初の脚に偶々三を許すことありと雖も、最後は常に四ならざるべからざるなり。この相違を研究し見よ、必らず思ひ半ばに過ぐるものあらん。

同一の調子を長篇に使用すれば、人を倦ましむとの非難、これ三なり。されど、こは、その詩の殊に叙事體なりとせば、如何なる異調を以つてするとも、長ければ長き程、免るべからざる自然の約束なり。且、詩の性質によりては、破調又は種々の異調を使用する爲め、却つて不自然と不嚴肅とを呈するに至るものなり。例せば、集中の『三界獨白』

の如き、八七(四四四三)と八六(四四三三)との交互調を用ゐたれば、八七調をのみ連用するよりも、多少の緊縮と落ち付きとを生じ、且、この交互調を連用するにより、各段に渡りて、自然と嚴肅とを破るに至らずと雖も、長ければ、倦みを來たすは止むを得ざることなり。されば、かゝる作詩上の無經驗說は、詮ずるところ、長篇叙事詩はすべて散文を以つて物すべしと云ふに等しかるべし。こは、四五年前、第一回韻文朗讀會の演說に於て、既に述べ置きたり。

押韻の非難、これ四なり。こは、わが第一集『つゆじも』に於いて說明せし如く、たとへ邦語の詩に於ても、その道をわやまらざれば、決して無意味、徒勞の事にあらず。且、わが押韻せるは、十音詩のみにして、而もその脚末は二重韻又は三重韻に限れるを注意せよ。邦語の韻、僅かに七種(乃ち、ア、イ、ウ、エ、オ、並に撥音ン又は長音に終るもの)に過ぎざれば、われは邦語に最も近き、かの以太利詩の如く、二重脚韻法を用ゐたり。これ思想上の變化と格調上の効力とを兩得せんが爲めなり。世人、やゝもすれば、押韻—殊に脚韻—の非を證せん爲め、古くは支考が和文用韻の拙戯を引き、近くは押韻すべからざる調又は個處に押韻せる惡詩を擧げ來つて、之が斷案を下さんとするものあり

と雖も、そは、わが十音詩の脚韻を非難する適例にあらざるなり。

その他、詩に術語、俗語、難解語等を挿入するに對して、世評とり〳〵なりと雖も、そは程度問題なるべければ、こゝに云はず。詩を解する能力なく、又はその傾向なきものにして、俗謠又は唱歌を以つて批判の標準と爲し、以つて所謂新體詩の難解と朦朧とを說くが如きに至つては、共に詩を語るに足らざるなり。詩人拾年の努力は決して渠等に外國詩を供せんとするにあらず、而も渠等は、外詩を讀む時の如く、字引と注釋とを得る便宜なきを以つて、現今ますます發達せんとする邦詩を難ず。詩は常に散文の如く通俗平易なるものにあらず。他日、日本文學史を編するもの出でん時、必らず、明治の聖代に於て、國家の根本生命を掌握せる活靈ありしと雖も、之を知得する識者少なかりしを笑ふならん。

われ、こゝに詩の外形に關することのみを云へり。蓋し自個の詩の內容に關しては、身づから之を云爲すること能はざればなり。

明治三十九年六月中旬

著者識

目次

上卷　夕潮

女護海島……一
世外の獨白
（一）磯姫の曲……一六
（二）無性斗神……二〇
（三）嫦娥のうらみ……二五

海邊雜吟（上）
明暗……三一
海のなげき……三四
君を思ひて……三八
わが影法師……四〇
いさり火……四二
蟹に寄す……四四
高岸沈思……四六
海邊雜吟（下）
朝出船……五〇

朝の夢……五二
あしたの神……五五
秘戀……五五
倉吉……五七
夏の眞晝……五八
夕べの神……六〇
高安月郊君に……六一
遠つ島根……六三
御富士……六五
靜思

あわ世の歡樂……六八
湖畔の靜思……七〇
圓き石……八八
島の歌……九三
有木の別所（成經獨白）……九七
散り行く紅葉……一〇六
天の橋立にて……一〇九
菫と少女……一一三
秋吟（雨中に立ちて）……一一六
二の笛……一一八

豐太閤（史詩）

戰捷の祈……一二三
清正望岳賦……一三一
明使追放……一三七
蔚山城……一四四
秀吉薨去……一四七
小海祠……一五五

下卷　悲戀悲歌

三界獨白
(一) 燭のゆらぎ……一六〇
(二) 闇の横木……一七六
(三) ときはの泉……一八八
叙事三篇
血ぬれる鐘……一九八
田戸の海ぬし……二一一
高地の霊語……二二一

旭日吟……二三七
叙情五篇
伊吹の螢……二四八
螢を踏みつぶせる折……二五二
雲翮々……二五六
常世の光……二六〇
ねむりは醒めたり……二六二
短曲
一海の響……二六八

二　無言の石……二七〇
三　自然のあゆみ……二七二
四　殘る憂ひ……二七四
五　細き指輪……二七六
六　夢の子……二七八
七　薫ゆる火かげ……二八〇
八　とはの寂み……二八二
九　樫の木……二八四
十　小暗き道……二八六
十一　まとふ怖れ……二八八

十二　うれひ一筋……二九〇
十三　時劫の森かげ……二九二
十四　いさゝ聲……二九四
十五　鍵を與へよ……二九六
十六　鏡を碎けよ……二九八
十七　蛇の河……三〇〇
十八　熱き眞砂……三〇二
十九　酒　與……三〇四
二十　悲哀の俘……三〇六
廿一　苦悶の鎖……三〇八

脫營兵……四四

上卷

夕潮

ゆふぐれ

女護海島

序

白帆は遥かに戀しき ものよ、
をとこは心に頼みの綱か。
大ぶね入り込む そのゆふぐれに、

新渓文庫

きそひて　出て來る　島人どもの
化粧は　あらたの　黒がみ姿。
優しき　手に　手に　持つ　わら沓を、
湊の　みぎは　に　置き並べつも、
之をば　うがたん　にひ島もりの
結べる　小紐の　しるし　に　すがり、
おのおの　分れて　みさを　を　守る。
ああ、とこしへにも　生きなん　ものが、
一夜を　いだくは　如何なる　さち　ぞ。
すなはち、頼みの　とも綱　切れて、
その船　遠くも　歸へらん　日　には、
歎きの　涙　に　その身　は　なかば

融けて　や　深みの　人魚　と　ならん。

（一）

皚々乎　として　風　吹き來れば、
みなぎる　大洋　二十重　に　倒れ、
鬱々乎　として　浪　逆まけば、
そびゆる　椰子樹　も　かゞみて　恐る。
岸べ　に　あらぶる　獅子　とは　何ぞ。
見よ、見よ。巖石　ぬれにぞ　濡れて、
かしら　を　擧ぐるは　活くる　に　似たり。
この島　まとふは　如何なる　蛇　ぞや、
しり尾　も　示めさず　動くに遇へば、

天柱　やすきを　これ　疑はる。
幾千百丈　みな底　深き
神秘の　奥　より　ゆるぎも出てつ、
ああ、茫漠たる　そら　をば　仰ぎ、
いと　さゝやかなる、　汝、海鳥　よ。
ながの身　を　護るは　アダム　の　子ら　か、
はた又　いづくの　流人　が　すゑ　ぞ。
静中　動　あり、動中　静　の、
寂莫　却て　一しほ　深し。
山にも、川にも、森にも、野にも、
住へる　ものら　の　影　だに　見にず。

（二）

山々　みどりの　眉　をば　染めて、
白きは　御空　の　ひたひ　に　殘る。
流れ　は　香樹　の　にほひ　を　乘せて、
ゆるくも　走りて　おほ海　に　入る。
野べ　には　鳥　あり、その名　を　知らず、
自由に　眠りて　羽がひ　を　やすむ。
大獸　小畜　小みち　に　遇へど、
その牙　その爪　用　をも　爲さず。
喬木　灌木　こずゑ　は　たわわ、
露けき　果物　食ふに　まかす。

空氣は稀なる力を帶びて、
天なる御門ゆ涼しく流れ、
かゞやき照らすよ、小草の色の
青きはあまねく地上に敷きて、
文化の足跡少しも受けず。
遠きも近きも、左も右も、
自然のけしきは活き活き踊る。
ああ、これ仙境——無名の主の
青牛ゆたかに關より逃れ、
悠々天壽を終へにし陸か。

〈三〉

晝夜は分れてこの地を見舞ひ、
風雨と戯れ、無手にて歸り。
變化は隱れてこゝにも來れど、
歷日あまりにもの長ければ、
天數地數の八卦にのらず。
剛柔いまだに交はらざれば、
難をば生ぜぬ有樣なるか。
物皆おのづと成り出でぬれば、
遠近ともども鋤鍬取りて、
たがへす勞苦はいづこにありや。
うれひの主豐を とじめぬ限り、
造化の所有に身づからなやみ、

火宅を現ずるものらはいづこ。
有形のほだしを遙かに去りて、
無形の位に融合するか。
咎なく、悔なく、思はず、爲さぬ、
草木に牝馬のいのちを繫ぎ、
優しく健きはかげのみ走る。
ああ、生々の理孤獨となりて、
いつまゝ、化育のいといと高き
對象を別ちて男子と成さぬ。
雲行き雨ふるこの島山に、
六龍遂には顯はれざりや。

(四)

そもそも何ものぞや、音樂のごと、
なみ風靜まる刹那と刹那、
そのひまかすめて幽かに聽ゆ。
山にはその山、川には川の、
おのおの發する御魂もあらん、
鳥にはその鳥、獸には獸の、
それぞれ固有のこわ音もあるを。
そも何ものぞや、音樂のごと、
なみ風かすめて幽かに聽ゆ。
その方向さへ確とはわかず、

たつみ に 向へば たつみ に 渡り、
いぬゐ に 向へば いぬゐ に ひゞく。
魑魅 罔兩 とは これをや 云はん。
見よ、見る 限りは、とこ世 の 夏 の
枝葉 は やわらか、その水 清し。
精魂 豈、また、若やがざらん。
剛健 頗る 自然 に かなふ、
椰子の樹、棕梠の樹、あなゝす、ざぼん、
芭蕉 の 葉かげ に、蘇鐵 の もとに、——
たとへば、あれ野の かしこに こゝに、
虫の音 一時に 高まる 如く、——
恨む か、歎く か、かこつ か、泣くか、

悲しく 哀れに 聽にも來たる、
調べ は をちこち 一つの ひゞき。

(五)

ギリシヤ の いにしへ 船人ども を
いざなふ 島根 の それにも 似てよ、
へだてゝ 聽きなば 怪しき ひゞき、
めあて を 定めて 近づき 見よや。
住民 ありけり——サイレン の ごと、
美なる は をんな の 機織りすがた。
前者 は、オルフアス 琴引き の 爲め、
巧み を 耻ぢ入り 移石 と 化しぬ。

後者は、却て、海より來たる
慰籍をば求めて心は亂れ、
炎熱烈しき樹のかげかげに、
無聊に倦みてぞ織り出す布の、
長きが如くに夏の日盡きず。
まなこを横ぎる梭の手ゆるく、
逃れて出づるは夢路のうつゝ。
せめては とのまゝ眠りに入らば、
目ざめて苦しき煩悶もなきに——
かよわき力の渠等ぞあはれ。
うつゝと夢路の境にありて、
われから とめ得ぬ歌をも、杼をも、

ねむげに合せて又くり返へす。
『はた地は織れども、着る人あらず。
着る人あれども、をみな子ばかり。』

(六)

日本の荒武者爲朝、むかし、
この根を襲ひて、美なるを多く
小舟に引きゐて南に去りぬ。
これ、この處の唯一の歷史。
祖先は いづれぞ。開祖は誰ぞや。
文明あかるき、光を惜み、
學術その口つぐみて云はず、

木訥　平易　は、神代　の　如し。
小波　に　尋ねば、小波　は　隱れ、
大浪　招げば、大浪　にげん。
こずゑ　に　訴へば、こずゑ　は　ゆらぎ、
木の實　に　語れば、木の實　は　落ちん。
ああ、單調子　の　安逸、安臥、
無理想、無何有　に　勞れも果てつ。
小蜘蛛　の　織り爲す　網に　なぞらへて、
芭蕉布　作るが　手足　の　動き、
なほ　飽き足らざる　心　の　糧　よ——
いづこの　果より　なぐさめ　來たる。
運命　卜する　卦　は　たゞ　潜み、

牝馬　は　空しく　いな鳴く　ばかり。
島民　とこ世に　その數　あまた、
柔順　さながら　配偶　を　得ず。
さびしき　その身　を　いだけば、胸に
燃え立つ　ほのほ　の　暑さ　に　堪へず、
南　の　岸べ　に　冷氣　を　呼べば、
天地　は　かをりて　感ある　乙女。
ああ、また　同性、同性　を　產む。

世外の獨白

(一) 磯姫の曲

岩に あら波 音ぞ 高く、
朝日 のぼりて こゝろ 寂し。
われは いづこの 果を 來たり、
われは いづこの 果に 行くや。
かぎり 知られぬ 濱は、東
西に のび行く 畫の 如し。

みどり 黑がみ 白き 越えて、
せな に 亂るゝ あらし 烈し。
ぬれし 砂地に わが 素足の
落ちて、一すぢ 引く は うれひ。
遠き 波 より 消えも行きて、
更らに よせ來る 波の うねり。
われは 友 なく 此世の 岸に
立てば、かなしみ うしほ 成して、
あはれ、いづこの 果を 來たり、
あはれ、いづこの 果に 行くや。

胸も どよめく 海の音の
凝りし いはほの 上に すはり、
沈む ゆふ日の 光 見れば、
ひとり わが身の かげぞ 薄き。

見よや、すなどる人の 子らは、
かたへ よぎりて 家路 行けど、
われは 磯姫、ひとり 殘り、
わらひ さゞめく 目には 入らず。
夜の氣 落ち來て この世 つゝみ、

萬物 ねむり に 入らん 時も、
われは とこ世 に こゝろ 醒めて、
冲の ふるさと 胸に ゑがく。

あはれ、深みの あわび貝よ。
なれが 住まひは くらく あれど、
かなしみも なく、憂さも 見えず、
あるが まゝなる すがた 戀し。

われも 生れは 海路 なれど、
母を 見知らず、父を 知らず。
めぐる 月日の しほに 浮きて、

かくも　夜る晝　やすき　を　得ず。

岩に　あら波　音ぞ　高く、
朝日　のぼりて　こゝろ　寂し。
われは　深み　の　底　を　出でゝ、
またも　うれひ　の　深き　知りぬ。

（二）無性斗神

ああ、われ、大地　の　御胎　に　ありて、
をのこ　と　生まるゝ　わづらひ　免がれ、
ああ、われ、御つち　を　母　とし　出でゝ、

をみな　と　歌はる　恥ぢ　をば　避けつ。

見よ、世　の　強きは、夜を　日に　繼いて、
名利　の　爲めには　おのれ　を　忘る。
見よ、世　の　弱きは、あしたに　ゆふに、
おのれ　を　折りても　かたち　に　耽ける。

見よ、世　の　猛きは、春　また　秋　に、
虎の子　熊の子　輪廻　の　もとる。
見よ、世　の　美なるは、年　また　年に、
直立種族　の　種　をば　殖やす。

人　こそ　知らざれ、その子　の　脊には
大なる　毛もの　の　這ひあがれる　を。
人　こそ　知らざれ、その子　の　手には
毛深き　前足　つきまとへる　を。

いな、いな、知らざれ、その子　の　父母　も
もとより　一つ　の　道　を　ば　這ひつ。
月日　の　如くに　今　分るれど、
もと　これ　谷間　の　しゝの子　猪の子。

互ひに　まろびて　いだくは　何ぞ、
おのれ　の　生みにし　おのれ　の　姿。

影　より　影　をば　樂み　活くる
人間、あはれや、その身　を　知らず。

ああ、この　燦たる　世界　に　ありて、
なほ且　人の世　いかでか　醒めぬ。
見にくき　髪の毛　かしら　に　のせて、
いつまで　まよひ　の　御殿　に　ねむる。

月よ、わが　むくろ　は　大地　に　成れど、
恥ぢ　あり、名ある　の　きぬ　をば　着けず。
小暗き　森　より　踊りも　出て、
われ　をば　いだきて　御空　の　きはみ。

ゆふべ に ほゝゑむ わが かゞやき は
しゝ 射る 人ら の 眞弓 を 照らし、
朝げ に またゝく わが まなざし は
軒端 に つるせる 獲物 に うつる。

あはれや、人間、その日 を 狩りて、
明日 はも わが矢 に うたれて 死なむ。
兩性 相待つ その 夢の間 は、
再び わが目 に 觸るゝ を 避けよ。

(三) 嫦娥の恨

西水 また 行く 三百五十里、
かの 西王母 ぞ わが恨み なる。
玉山 出だす は 璧 のみ なりせば、
磨きて わが手 に 卷くべき ものを、
不老 の くすり に 不死なる かをり ぞ
わが身 を あざむき あやまたしめぬ。

かの神 蓬頭 の 姿 を あらはし、
くすしき 賜物 わがつま 羿 に

授けし　その夜　ぞ、われ、世　を　思へば、
　世人　も　同じく　その　伴がら　か、
獣　にも　等しき　髪の毛　いたゞき、
　死ぬれば　長き尾　示めす　と　見えぬ。

妙なる　世界　ぞ　ひたすら　くゆりて、
　いと　ほがらか　なる　つき夜　の　如し。
わが世　を　忘れつ、わがつま　忘れつ、
　また　おのれ　を　さへ　忘れて、あはれ、
たゞ　かの薬　の　節匣　を　いだきて、
　高ぞら御殿　に　逃げ　こそ　來つれ。

御空　は　燦爛、星、花　降らして、
　眞晝　の　光　に　錦　を　飾ざり、
黄金　まばゆき　うてな　の　うち　には、
　手枕　しばし　の　夢、幾むすび。
さは云へ、わが魂、たゞ　一とき　だも
　やすき　を　得たる　の　ためし　は　あらず。

あま飛ぶ　おほ鳥、小鳥　の　羽がひ　は、
　羽ばたき　毎にも　眞玉　を　はたき、
碧絲　は　露　とも　散り布く　晴れ庭、
　あまたの　腰元　薄ぎぬ　にほふ。
さは云へ、わがたま、たゞ　一とき　だも

やすき を 得たる の ためし は あらず。

萬燭 皓々 しら雪 はぢらひ、
夜 を さへ 晝間 の 不老 の 宮 の、
とばり は 紫、その色 深くも、
かをりて おぼゆる 不死なる いのち。
さは云へ、わがたま、たゞ 一とき だも
やすき を 得たる の ためし は あらず。

ああ、汝、しら雲——もろき は しら雲。
却つて 戀しき なんぢ の すがた、
五色 の 光 に かさなり 合ひつゝ、

先きなる 影 より 消え行く さま は、
たとへば あかつき、熟睡 の 床 より、
暖夢 つぎつぎ のがるゝ 如し。

わが身 も、歡樂 あまき が 如くに、
ほろびて またまた 生まるゝならば、
寂しみ 非想 の 天 まで 積むとも、
苦しき 思ひ の とゞまるまじを。
わが壽 は、三千三百歳 をも
刹那 に かぞへて、なほ 盡きざる よ。

涙 に あふるゝ 下界 を 離れて、

却つて　苦しみ　一しほ　増しぬ。
なまじい　久遠　に　のぞみ　を　求めて、
得たる　は　空しき　つき夜　の　くらゐ。
澄みては、むらがる　とこ世　の　暗黒　を、
こゝろ　は　孤寂　の　あし場　に　迷ふ。

無限　の　刹那　の　その數　かぞへて、
わが胸　おそれ　に　おのゝき　震ひ——
見よ、やみ　遠くも　見え透く　雲間　ゆ、
聲なく　刻める　うれひ　は　迫る。
ああ、この　いのち　は　うつろ　の　酒甕、
永劫　わが魂　ねむり　を　盛らず。

西水　また　行く　三百五十里、
かの　西王母　ぞ　わが恨み　なる。
玉山　出だす　は　璧　のみ　なりせば、
磨きて　わが手　に　卷くべき　ものを、
不老　の　藥　に　不死なる　かをり　ぞ
わが身　を　あざむき　あやまたしめぬ。

海邊雜吟（上）

（一）明暗

君と ふたり たどりし
濱べ に 出で、けふ、又
ゆるき 浪を ながめて、
こゝろ 動く 夕かた。

君が 行きし ふな路は
岩井の鼻 より 消え、

遠き 富士 の すがた を
夜ぎり とぎす 小入り江。

つかれ 歸る 漁夫ら の
船は 見えぬ 櫓の音、
あはれ、寂として、たゞ
有るは 月 と わが事。

ひかる 海を 渡りて、
黑み 來たる ぬる風
あびて 立てば、胸には
悲喜 の おもひ かきまぜ。

廣く、明く、小暗き、
噫、この海の おも見よ。
君と むかし語りの
戀も 斯の如き よ。

(二) 海のなげき

富士の あなたに 夕ばえ 消えて。
せなに 夜神の 迫りぞ來たる、
わが身 ひとりの 濱べに 立ちて
海の なげきを 窃かに 聽けば、

これも いためる 有情の 言葉——
『日々に 思へば、思は まさる。
まさる 思の 深きを つゝむ
胸は、あらしに かき亂されて、
やすむ ひまなき 迷の影の、
暗き うれひは いのちの 底に
清き 眞珠の 眞玉を 産みて、
人に 示さぬ この 秘め事 よ。
『秘して つゝみて、つゝみて 秘して。
ゆるく 滿ち張る 浪より 浪に

天は　うつれど、照る日は　照れど、
とけて　流るゝ　光の　奥は
いつも　やみ路の　力に　振ふ。
夜々の　星々　その數　あまた、
沈む　とし月　限りも　知らず。

『みどり　混沌　よどむ　がうちに
活きて　踊りて、且、悲みの
過去も　一つに、未來も　こゝに、
今を　盛りの　滿干の　潮は
潮の　いづこに　はてしを　得んか。
亡ぶ　ものこそ　うらやましけれ、

いつか　心の　憂さ　をば　晴らす。

『やまと建が　立花姫を
近く　沈めて、遠くも　いにし、
昔がたりの　勇氣を　鼓して、
いたく　忍べは　しのぶに　餘る。
ゆふべ　寂しく　ひろがる　おもの
恨み、無限の　涙間を　渡り、
淺き　みぎは　に　寄せては　返す。』

あはれ、とこ世に　若ゆる　海よ。
海よ、わが身と　なやみを　分て。

あたり　静かに、山々　黒き、
空に　殘るは　三日月　ばかり。
『戀』と　眞砂に　指　もて　書けば、
白き　小浪は　手を　さし延ばし、
さッと　ぬぐひて　引きしりぞきぬ。

(三)　君を思ひて

君を　思ひて　濱べを　行けば、
濱の　眞砂の　數さへ　かさむ。
わが身も　かくや　碎け行く。

君を　思ひて　なぎさに　立てば、
浪の　うねりの　道こそ　あはれ。
わが身も　かくや　消えて行く。

君を　思ひて　三日月　見れば、
暗き　磯わの　音にも　響く。
わが身も　かくや　細り行く。

行きも　やられず、去りもし　えせず、
まどふ　心に　いさり火　もゆる。
わが身も　遠く　浮ぶ身　か。

君を思ひて筆すみ執れど、
苦吟一夜さ詩の句を爲さず。
ああ、われ若き戀やする。

(四) わが影法師

われ行けば、かれも行くなり。
われ立てば、かれもとゞまる。
月かげに、夜のごと黒く、
投げ出だす二間の法師、
浪あらふ砂平らかに
よこたふる二間の法師。

振ると見ば、振るへころすれ。
ゆると見ば、ゆれても見ゆる。
その頭潮に うつして、
潮いまだ浸し能はず。
その足に蟹這ひ寄れど、
蟹かつて攀ぢもし得せず。
すそ長く引くは、貴とき
神わざか、はた海靈か。
いづこなる國の秘密を
身にもちて、ひそみや來けん。
たゞ無言、われに從ひ、
松原を見えつ隱れつ

わが宿に のぼりぞ來たる。

(五) いさり火

おほ浪 靜かに 眠りに 入りて
ゆめ路に かゞやく 光の 如く、
小星の つき夜に まぎれて 浮ぶ
その火よ、何もの、見えては 消ゆる。

み冬の夜ならば、氷を踏みて、
山より 出て來る 魔性のもの が、
藁火を ともして 海べを 渡り、

獲物を あさるに さも 似る影 よ。

三更 ふけ行く 自然の あなた、
無 よりや 產るゝ 世界の 如く、
明滅 起滅 の 境に ありて、
なほ且 燃ゆる は 如何なる 熱ぞ。

すなはち、東の 戸びらぞ なかば
開けて、眞白き 馬毛を 吐けば、
おほ空 別れて、浪間を 遙か
歸るは 小黑き 釣り船、小船。

先なる　ひゞき　も、あとなる　音も、
神矢　の　如くに　亂れず　寄り來。
なぎさ　に　立てるは　娘　か、妻　か——
みよし　の　左右　を　いだきて　迎ふ。

（六）蟹に寄す

夏　の　眞晝　暑き　を
海に　去るは　大いを、
寄せて　返す　浪間　に
のがれ出る　は　この蟹。

輕く　砂　を　よこ這ひ、
苦　を　も　知らぬ　行きかひ、
大いなる　を　あざけり、
ちさき　まゝに　氣　滿てり。

世にも　奇しき　餌　を　食み、
ちから　強き　小ばさみ。
なれ、藝術　に　身を　入れ、
立てば　王　を　こそ　切れ。

ひろき　濱　を　迷はず、
長き　日　をば　あせらず。

人目　遠き　ほゝ穴、
おのが道　を　追ふ　かな。

（七）高岸沈思

（靈太郎木村君に）

高き　岸べ　に　うち出て、
洋々　の　涙　見渡せば、
秋　の　初風　身に　吹きて、
京　の　こゝろ　動く　かな。

見よや、大海　目もはるに

あまね照る　光　照らすとも、
威名　天下　に　赫々　の
偉人　に　比して、いづれ　ぞや。

見よや、白雲　北に　湧き、
なか空　さして　登るとも、
代々　の　亂軍　きり拔けて
ろの名　を　擧ぐる　雄者　あり。

如何に　冲べ　の　暴風　は
阿修羅　の　如く　たけるとも、
一夫　をどつて　泰平　の

政治を亂だすたとへのみ。
怒濤二十重に捲き倒れ、
大地のもとゐゆするとも、
立ちて靜かにほゝゑむは、
いづれの流の哲士ぞや。

見よや、よろづの神々を
產みてしうしほ渦と化し、
めぐる無間の上をさへ
ひと葉の船は渡るなり。

あはれ、自然をのり越にて、
自然に歸るものは誰ぞ。
人はむくろを解脫して、
あらたに人のわざを知る。

いまだ功名投げうたず——
いな、いな、骨にとほるまで、
海のうしほの若やぎて、
いかれよ、鳴れよ、とゞろけよ。

高き岸べにうち出てゝ
洋々の浪見渡せば、

あまた 有情の 泡立ちて、
君 住む 京ぞ 忍ばるゝ。

海邊雜吟（下）

（一）朝出船

御富士の いたゞき おもてを 拭ひ、
たな引く 貫抜き 左右に 搖れば、
世びとは 短き夢より 醒めて、
濱邊は 忽ち 歡呼の ひゞき。

空氣は 新たの いのちを 傳へ、
眞砂は 平らか 清きを 誇る。
男波は 馳せ來つ、女波は 招き、
出船の よろひを 待てるに 似たり。

もと、これ、鍛へし からだと 腕に、
海をば おのれの 家とも する 子。
もと、これ、手馴れし たくみに 依りて、
ろの足 輕くも 作れる 小船。

『えいや』の かけ聲 ちからを 呼びて、

押し出す　獵船、勇める　親子。
ちいさき　世界に　朝日を　浴びて。
浪間の　奥へ　と　遠くも　消えぬ。

(二)　朝の夢

夜網引の　朝ぶね　着きぬ、
　勇むは　たゞに　魚ならず。
人々の　罵る　聲に、
　寄せ來る　波も　きほひあり。
夜もすがら　あさりし　獲物、

　小砂の　上に　うち撒けば、
跳ね飛ぶは　大鯛、小鯛、
　甲頭魚、三島、かながしら。
いろくづに　賑ひ初むる。
　見よ、大濱の　西ひがし、
左には　サフランの　雲、
　右には　富士の　新よろひ。
この世界　唯一の　寶、
　いよいよ　光放つ　をば、
相應しき　値踏み　や　せんと。

いづこよ　來たる　人　あまた。

朝日　照る　砂山　越えて、
　丸籠　擔ぐ　かげ　長く――
その昔、ユダヤ　の　野邊　を、
　水がめ　運ぶ女　の　如し。

つぎつぎへ　現はれ　來たる
　その影　計へ　立たずめば、
物思ふ　わが身　は　今や
　太古　の　夏　の　夢　に　入る。

(三)　あしたの神

富士　の　いたゞき　赤らむ　は、
あした　の　神　の　露拂ひ、
東　の　網　を　地引き　する
網　に　明け行く　濱邊　かな。

(四)　秘戀

浪　の　上に　日　の　かげ、
落つる　朝　の　すゞ風、

われは　濱べ　さまよひ、
よべ　の　夢　の　あと追ひ。

砂　の　上に　君が　名、
かさね　書くも　おろかや、
とても　遂げぬ　秘め戀、
白き泡　の　よそほひ。

海に　浮かば、この胸
獲物　なき　の　釣り船、
陸に　あらば、この魂
行く手　知らぬ　あり樣。

見えて　のぼる　いとゆふ、
あはれ、熱き　血　を　吸ふ。
われは　身をば　横たへ、
けふも　いだく　小悶へ。

(五)　倉　吉

倉　が　お歳は　まだ　十六　と。
三十二三　の　澄ました　男、
われも　詩　に　飽く　時あらば、
君が心　に　歸りたや。

(六) 夏の眞晝

夏の眞晝、譬へば
白き をんな の むくろ。
立てば、四尺七寸、
光放つ 眞うつろ。

みどりの髮ふくよか、
熱き風に解くれば、
燒けし砂の上にも
ありきや、訪の餌ば。

玉の如き心の
壓に延べし その影、
世びとの目に うつらで、
あまつ御空 追ひたげ。

日より生れ、その日に
焦れ行く はながｴ戀。
幾萬億里 のぼりて、
身をや搖する かげろひ。

あはれ、どよむ深みを

涌きぞ出でし　テチス　よ。
わが目　映ゆき　間に、
なが　御すがた　見たるよ。

（七）夕べの神

とんぼ　釣る子　の　かしら　をば
夕べ　の　神　は　ろと　越ゑて、
そよげる　蘆　の　一葉　より
おのづと　暮るゝ　河邊　かな。

（八）高安月郊君に

寄せては　返す　白浪、
ひびき　も　更けて、三日月
横さに　照らす　海のも、
平らか　なるよ　わが胸。

凄さ　を　獨り　忍びて、
光は　青く　消え行く
心の空　に　住まへば、
濱邊　も　遂に　みな底。

かの世に耳を澄まして、
亡き人々を招けば、
かたちは見えず その聲、
至るに遠し その岸。

立たずむ足を洗はれ、
はじめてわれに歸りぬ、
さればぞ、西の都に、
清雅の詩人今如何。

(九) 遠つ島根

(有明君に)

遠津海遙かにかすみに入り、
かすみの奥よりかしらを擧げ、
沈思に耽りしそのほこりを
ほのかに示めすか、大島が根。

吹き來るしほ風なまぬるくて、
南の熱さをこなたぞ知る。
七重のしき波寄せ來りて、

海路の響きをこゝにぞ聽く。

戀しの姿や、ろれ、靜かに
ひじりが御胸に映れるごと、
その身のなかばを深みに籠め、
みどりの冠を御空のはて。

ああ、そのみどりは轟く浪、
はためく御空の間に浮き、
眠れる如きその島根を
ゆふ靄包むにまだ早きよ。

行きにし御靈の住ひに似て、
平安の溢るゝ墓場やある。
世の物思ひの群がる時、
心の船出し、君と行かん。

(十) 御富士

(花外君に)

わが世のつとめをけふも終へて、
濱邊にうち出で富士を見れば、
御富士は寂しきかしら擧げて、
わづらひ解脫の神に似たり。

ゆふ日の光は遠く沈み、
その薄むらさき雲を疊み、
ああ、なぎ渡れる深き空に
輪廓正しき峰のさまよ。

ゆるがぬ力をゆふべに染め、
いよいよきわ立つその御姿。
とゞろく水際に心澄めば、
いよいよ貴ときその居ずまひ。
高きに浮びて、とこしなへの

あま照るやすらひ、實にもそれか。
ゆふぐれ静かに隱れ行きて、
わが身に殘すはいこひの影。

われ、今、茅ヶ崎、詩神追ひて、
心を小暗き波に碎く。
君、去年、甲州、山路行きて、
御山のすがたを如何に見しや。

ああ、世の歡樂

ああ、世の歡樂あまさに過ぎて、
夢路にまたがる春、そのうつつ、
遠きは薄もや、近きは花の
ねむりか、心のまなこをめぐる。

それ、たゞしきりに降るほそ雨の
窓には、そゞろの戀もや秘めん。
それ、たゞ曇りて吹くやわ風に、
浮き立つ思のいこひや住まん。

ああ、とこ靜かの春、そのうつつ、
うつろのまぼろしあしたに破ぶれ、
大地は音なきほろびのかげを
一ひら胡蝶の羽がひにまかす。

若き身もたげてわが世を追へば、
ああ、亡き乙女よ、見えては消ゆる。

湖畔の靜思

（二）

琵琶のうみづら　風なぎて、
雲　一片の　往き來　だに、
悟りを　得たる　山人の
やすきに　增して　見ゆるかな。

青き　御空の　日の丸も
融けては、こゝに　形なく、
高き　山邊も　靜さては、
その　こゞしさを　失ひつ。

淺きに　似ても、淺からで、
底に　達せぬ　天の色、
暗きが　如く、暗からで、
うちに　輝く　その光。

神代　分れし　その昔、
寂しく　照らす　エーテルの、
上下　左右を　現はさて、
空に　滿ちけん　有樣よ。

追ふて　限り　は　知らねども、
廣き　が　うちに　平和　あり、
つかみて　手　には　殘らねど、
平和　の　うちに　いのち　あり。

歌　の　ひじり　が　筆取りて
ながめし、水　の　とこしへ　に
よどむ、力　の　うしろ　には、
深き　御かげ　ぞ　動くなる。

（二）

われ、端なくも、詩の界
乘りて　來りし　一葉舟、
輕く　浮びて　物もへば、
うれひ　に　延ぶる　いかり綱。

下に　向ひて　沈み行く、
長き　おもり　に　底　觸れて、
をどり出づる　は、龍の宮、
龍　が　さゝぐる　玉　ならず。

また、かの　燃ゆる　思　をば
眞あか　の　紐　に　つなぎ合ひ、

この世の苦をば逃れけん、
むくろのひとつにもあらず。

はた又、深き岩かげの
下界につゞくほら穴に、
紫紺の實をば結ぶてふ、
萬年青の若葉それならず。

探ぐる目あてのあらばこそ、
かぢ取り直す身にもなれ。
涙のまゝなるわが思、
迷ふがまゝの西、東。

混沌いまだ開けずば、
昔のさまに歸るなり、
無念無想の海の上、
たゞよふわれも、はた舟も。

（三）

水のおもより立ち登る
あしたの虹の棚引かば、
晴れし御空の長橋は
長等の山を越えんとし。

野州の松原ゆふぐれの
虹あらはるゝその時は、
落ち來る雁の列ならて、
堅田のせとをうち渡り。

香取が浦のかぢ枕、
浮き寐の鳥の羽根のごと、
七色あびる小蒸氣の
一つ二つも靜かなり。

ああ、なやみあるわれも亦、
まなこと共に延び行きて、

くれなゐ薄き綾絹の
つゝむがまゝに消ねんかな。

（四）

われ、長濱の岸べより、
西にうすづく日を見れば、
その光線に送られて、
みよしを立つる帆かけ船。

その影小さし、遠ければ。
その足遲し、廣ければ。
その聲聽かず、隔たれば。

その帆　光るよ、白ければ。

たゞ　沖合　に　とゞまりて、
行くか、歸るか。さながらに、
別れ　を、惜む　わが友　の
高き　岡べ　に　立てる　ごと。

ああ、彼　一歩、われ　一歩、
進むに　つれて、わが體　も、
みぎは　の　蘆の葉　に　乘りて、
引かれ行くらん　こゝち　する。

(五)

あはれ、寂しき　海のおも、
自然　の　さかひ　薄らぎて、
限りなき　世　の　悲み　の
やわらぐ　奥　ぞ　忍ばるゝ。

ああ、思ひ見ば、こゝも　亦、
御法　に　あかき　淨土院、
『眞如』　の　月　を　抱きつゝ、
最澄　眠る　ところ　かや。

あはれ、ゆかり は 紫の
藤波 よする 樹のかげ に、
『知止』の 道理 を 見し人の
神 と 奏はる 書院 かや。

ああ、また 思ふ 卓まくら
旅 のころも を 脱ぎ更へつゝ
おのが 俳句 を 樂しみて、
翁 の ゐます いほり かや。

（六）

げにも、妙なる 玉垣 の

うちに ます 御姿 よ。
ああ、貴しや この社、
誰が 祭りけん ろの主 よ。

圓き かゞみ は 懸け無くも、
おもひ に 映る さかき葉 や、
水 は 流れて、而も 亦、
かるゝ 時 なき わだつみ よ。

いつの世 出でゝ、千斤 の
おもき 袂 を ひろげけん。
いづこの果 に、たゆみなき

羽がひ の 裾 は 及ぶらん。

人は 強いても 定まり の
目あて を 好む ものなれば、
なが名 に よりて、忽ちに、
異なる 魚 を 呼び起し。

至る處に、なが足 の
見ねて、這ひ行く おもかげ を、
みのる 田畑 に 侵し入る、
大蛇 の 如く 歌ひ出で。

あした ゆふべ の 眺め よく、
澄みて ゆかしき なが面 を、
辨才天 に なぞらへて、
竹生 の 島 に たてまつり。

月 の 夜長 に 鳴る浪 の
響 を 糸 に たとへけん、
なが圍り をば 繪がき見て、
琵琶湖 と 唱へ 始めけり。

（七）

見よ、夏の頃、その水 の

色白ければ、雨と なり。
冬、雲 湧きて、天上 の
山 また 山 は 雪模様。

比良八講 の 風 吹かば、
今も 法華經 となへつゝ、
舟人ども は あらたか の
天狗が岩 を かしこみつ。

ああ、恐るべき 比叡おろし、
北 の 舞ひ行く 浪 立たば、
熱さ 火焔と 這ひ延びて、

散らふ しぶき は 燃ゆる ごと。
見よや、白浪 十重 二十重
倒れて、起きて、高まれば、
あらし に なやむ 大木 の
天 に さからふ 勢 よ。

さはさりながら、大わだ の
奥なる わだ に 比べ見よ、
二八月 の 荒れ時 も、
神 の 無聊 を いやす のみ。

（八）

洋々たる　あわ海　の、
ながれよどみし　その水　よ。
重き力　は　三井寺　の
鐘　に　廣がる、ろの胸　よ。

神秘　は　こもる　しき浪　の、
深き　御かげ　に　いのち　あり、
太古　の　さま　の　あけ暮れて、
寂しき　うちに　光　あり。

嗚呼、琵琶のうみ、風　なぎて、
紫　の色　浮ぶ時、
人　に　譬へば、とこしへ　の
やすき　を　得たる　こゝち　かな。

圓き石

この世の苦みをも
かつて嘗めぬ わが友、
昔に歸る こゝろ、
之も圓き 石ころ。

樂しき空にありて、
嗟、土を踏まぬ足手、
高く飛ぶも 飛ばぬも、
凝りて結ぶ あま雲。

ネビュラ 冷え氷りて、見よ、
照らす 小星の 月夜。
圓きに就く靈あり、
自然のまゝ その態。

いまだ憂ひ悲しみ
もつれ出でぬ この君、
卷くが まゝの から糸。
歌ふものは、赤人。

佛敎 こゝに來らず、

人、死の味を知らず、
花のかげに枕し、
眠むるさまを譬ふらし。

暑さ時もいくとせ
過ぐる家の庭もせ、
寒さ時に會へども、
道に何の毛ごろも。

取りて見えぬその裏、
打てば堅きそのつら。
過去を問へど、示さず、

口なければ、その筈。

棄つれば、また、輕らか、
まろぶことも たまさか。
行ゑ問へど、語らず、
なさけ無きか、然らず。

雨に ぬれて、忽ち、
乾くに 早き かたち、
涙もろき ものには、
住ひ易き この庭。

雲　無心　にして　出て、
天に　かざす　ゆふして。
之は　立つ　を　慎み、
獨り　神や　見る　意味。

太古　の　さま　傳はり、
こゝに　この　手本　あり、
日にや　新らしき　石、
盡きぬ　さち　を　この岸。

島の歌

あはれ、戀しの　佐渡が島、
翁　が　歌ふ　荒海　に、
日蓮　ゐます　ものならば、
宗教　いまだ　命　あらん。

あはれ、ゆかしの　隱岐が島、
その身　を　わぶる　法皇　の
御魂　ゐまさば、　今も　尙
僞忠　の　人　は　耻ぢ死なん。

ああ、久方の　壹岐、對馬、
さかひ　を　越えて、敵國　の
船　押しよする　その日　にも、
その　犧牲　こそ　憂かるらめ。

ああ、臺灣　は　わが　版圖、
千島　の　果　も　覆ひ羽　の、
南北　長き　島々　に
なやめる　人は　幾許　ぞ。

ああ、松島　の　秋　冴えて、

西行　筆　を　投げうちぬ。
竹生の島　の　名　は　高く、
琵琶湖　に　うつる　月のかげ。

ああ、島々　は　多けれど、
われに　ゆかり　の　淡路島、
淡き　すがた　は　朝じほ　の
かすむ　うち　より　現はれつ。

須磨　の　濱べ　の　松風　の
夢　吹き拂ふ　故里　や、
むかし　いませし　たらちね　の

母の御顔の浮ぶごと。

呼べば、慈愛の手を擧げて、
われを招がんこゝちしつ。
ゑめば、滿ち來る新じほに、
わが身の今を問ふごとく。

ああ、われ旅にさまよひて、
つとを納めぬ久しさよ。
十の指をりかぞふとも、
いにし月日は歸り來ず。

わが日の本の島々の
數にわたりて、わが思
千々の亂れを解き分けて、
やすきを給ふ日こそ待て。

有木の別所

（成經が獨語）

松の樹立一むら
低く茂る山かげ、
上を慕ひ、ひたすら
*「厭離穢土」といひたげ。

その麓に　小高く
　盛れる　土よ。なれのみ、
奢る　平家　長らく
　ねらひし、人の　たのみ。

たとひ　むほん　とは云へ、
　源氏がた　の　たくらみ。
多く　かたらう　家々、
　一も　來たり　得がたみ。

うつり易き　花の香、
かはり易き　世の常、

恨み　かこつも　愚か、
　こゝに　少將　成經。

かへり見れば、かの島、
　冲波津　に　こと寄せ、
都だより　待つ　ひま、
　はやも　露　の　二とせ。

ながらうて　こそは　增され、
　胸に　迫る　悲み。
戀ふる　父は　殺され、
　何を　ひとり　樂み。

おのれ、惱き　清盛、
　吉備の國　へ　われをも
定め置きて、その　宣言
　更へし　さまの　刈り菰。

やがて　いち門　亂れて、
　亡び失せん　その時、
榮華　の　夢は　覺めて、
　あはれ、殘らん　いへ軒。

ためし　は　良き　如意尻、

うたてげなる　賤が家、
障子　に　さへ　しみ入り、
　※「欣求淨土」　見ぬ　かや。

身こそ　思ひ捨てたれ、
　いまだ　晴れぬ　この胸、
響く　鐘に　ほだされ、
　日暮　に　浮く　うき舟。

つなぐ　玉の緒　絶えば、
　われは　知らず。山寺
訪ひ來る　もの　ありせば、

たゞ　古跡　を　見がてら。

あはれ、朽ちし　その壁、
　しるし　ばかり　この墓。
春　の　あらし　吹くなべ、
　夜もすがら　の　谷なか。

噫、　八重もぐら　押し分け、
　苔　の　上に　手を　つき、
いたく　叫ぶ　あり明け、
　聲　冥途　まで　貫き、

萬事　忘れて　眠ひる
　君　が　耳に　至らば、
噫、一たび　千早振る
　神　を　起せ、ゐまさば。

われと　入道　康頼、
　千重　の　卒都婆　の　功德、
かの　鬼界が島　より
　渡り來たる　この奥。

聖き　風も　常樂、
　眞如　に　照る　御靈　よ。

既に　消えし　善惡、
今　一返　の　味かた　よ。

ありし　昔を　語れ、
死に後れし　なが子　に、
わが誠意　に、誰れ誰れ、
數へ擧げよ　世の鬼。

島は　名のみ　悍くも、
恐るべき　は　都　よ。
たとひ　歸りのぼるも、
こゝろ細き　ところ　よ。

さばれ、こゝに　參る　は
またと　かなひ難からん。
この　卒都婆　を　立つるは、
噫、生死　の　巷　ならん。

七日　七夜　の　勤め、
明けて　つらき　別れや、
まなこ　曇る　しのゝめ、
ふたり　出づる　破れ家。

あはれ、有木の別所　よ、

都を去るいく谷。
あはれ、父の居場所よ、
何億里、苔の下に。

*成親、如意尼の古障子に手習ひして、この両句の心を示せる跡ありき。

散り行く紅葉

ああ、もみぢ葉のかげ赤く、
てん地の氣をば呼吸して、
散り行くさまを讐ふれば、
その德高き山人の

こゝろ靜かに、安祥と、
知死期にのぞむすがたかな。
山の立ち樹も、岩が根も、
苔も、草葉も、はた下に
渡せる橋も、小流れも、
ともに緣ある その御弟子。
その悲みをあざやかの
光に放つゆかしさよ。
四大分るゝ小あらしに
一葉一葉の舞ひ下る、

蝶か　花か　を　水に　浮け。
水は　流れて、その列　を、
沖の　舳艫の　つゞく　ごと、
岩間がくれ　に　運ぶ　なり。

ああ、行さき　は　いづこ　ぞや。
われ、その道　を　見守れば、
先きの　船　より　消え失せて、
相つぐ　ものは　限り　なし。
すべて　ひじりの　乘る　なれば、
他界　に　入るや　そのまゝに。

天の橋立にて

（舊友とめぐり會へる折）

天神　地神　九世　の　戸　の
あまの　橋立　ゆふぐれて、
こゝろ細くも　消え殘る
松原　ながき　涙の音。

つゞみ　に　しては、その昔、
君　が　好みし　歌　ならず。
笛　とし　聽けば、且は又、

わが　吹き慣れし　いろ　出でず。

右に　左に　吹く風　の
ひゞき　よ、しばし　止みねかし。
千歳の浦　よ、名　の　如く、
久しき　友　を　なぐさめよ。

ふたり　別れて　十餘年、
わかき　さかひ　は　夢　ばかり。
海やま　遠く「時」の　矢　の
行ゑ　たづねて、相知らず。

われ　は　東に、君　は　西、
さすらふ　空　は　高けれど、
飛びかふ　雲　の　中絶えて、
うれひ　に　沈む　世　なりけり。

さばれ、相會ふ　この日　こそ、
むなしき　月日　よび起し、
老い行く　われも　いにしへ　の
わかき　に　返へる　こゝち　すれ。

しづかに　うてる　わが脈　の
ちしほ　に　今や　東風　吹きて、

千々の おもひは わが胸に
うしほの 如く 湧き出でつ。

わが故郷に、うちつれて、
すゞき 釣る 夜の うれしさ。
之には いかで 増すべき ぞ——
旅に 來りて、月 無くも。

満つる 記憶の おのづから
この松原に 輝きて、
暗き 夜つゆは 千萬の
こゝろを 照らす 光かな。

菫と少女

（お俊傳兵衛の墓に少女
の菫をつむを見て）

なれも 宿世は 清く
結ぶ 露の 身なりけん、
白き からだに 宿り、
ゆふべに 引く かげ 二間。

立てる 細腰 まげて、
かゞむ 乙女の すがた。
生れ更らば、同じ

すみれ　と　咲かん　その邊端。

なさけ　深めて　圍む
墓　の　底も　練り塀、
冥途　に　立つる　家ぞ
多き　お俊　傳兵衛。

責むる　勿れよ、世びと、
あらぬ　道　の　さまよひ。
義理　に　からむが　爲めに、
罪　を　いだく　その戀。

あはれ、あだなる　心、
胸　に　をどる　防がば、
をんな　形に　追はれ、
その美　つひに　枯れ把。

許すべき　ところ　あり、
いまだ　盡せぬ　いのち、
こゝに　菫　と　かはり、
咲きや　出てし　おもゝち。

心して　摘め、をとめ、
人　を　誘ふ　むらさき。

袖に ゆかりの 運命
なれにも あり、このささ。

秋吟

（雨中に立ちて）

蛇の目がさ　さしかけて、
歩む　道　踏みしめて——

その柄　をば　持ちかゆる、
心　さへ　降り　消ゆる。

雨の音　静かなり、
けさ　は　尙　その　ひかり。

見ゆる　物　皆　あかき、
空の色——　誰が　畫がき。

傘のへ　に　散る　もみぢ、
ひと葉　にも、　この　小虹。

里は　今　秋　深し、
返り見ば、　かの　土橋。

二の笛

道のべに　風も凍りて、
寒き夜は　人のかげなし。

家々の　軒に連なる、
瓦斯燈も　ねむたげに見ゆ。

月のみは　高く照らして、
やせ犬の　おそれ増すなり。

憂々と　さわべるの音、
長靴の　巡査過ぎけり。

その跡に　出會へる二人、
『爲吉か。』　『あ』と、立ちどまり。

持つ杖の　さきを交して、
手ごたへを　互ひに受けつ。

『仕事は』と　高きが問へば、
『まだ』なりと　低きが答ふ。

『更けては、な、　わし　は　眠たや。』
『さて、男、　いま　一まわり。』

高下駄　の　音　ふみしめて、
四辻　を　右　と　左　へ――

別れ行く　笛の響　に、
あめつち　は　親子　と　聽ゆ。

詩史

豊太閤

われ、豐太閤の事蹟を見て、最も感ずるところはその外征にあり。彼、朝鮮を得れば、大明國に向ひしは勿論、明國を平らげば、印度、ペルシヤ、否々、世界をも討伐せしなるべし。然して、その目的とするところは、かゝる外界の事件にあらざりしなり。彼は、無意識的に、自家心靈の要求を滿たさんことを欲せしなり。一國を擧げて、その內部的安心を求め居りしなり。實は、その手段を選ばずして、之に盲進せしなり。されど、われは、光秀征伐時代の秀吉よりも、征韓時代の豐太閤を愛するものなり。先きには、機智あまりに多くして、人の同情を引かず。後には、大愚に似て、而も神々しきところあり。國家の內部的生命を與ふる文藝その物は、知らず識らず、彼に依つて、その眞意を發揮することを得たりと云ふべし。

戰捷の祈

（一）

東南　やうやく　雲　やわらぎて、
西北　はじめて　風　また　靜か、
三拾年功　われ　誇らずも、
四海　の　外　まで　威は　及ばんず。
徒手して　天下　を　握れる　ものは、
いにしへ　賴朝、今　はた　誰ぞや。
好友、あはれや、世界　を　知らず、

富士野の巻狩たゞ止んぬるよし

（二）

獨立九年の汗馬の勞も、
なほ且幕下に英雄さかえ、
勢さながら大わだつみの
泡立つ如くに、ああ、鳴り響く。
肉飛び、骨さけ、氣は碎くるも、
堂々この士をいかんが默す。
微力に起れるこのわが身には
關白何ぞや、早や投げうちぬ。

（三）

去年のこの日に諸侯を集め、
聚樂の屋形に外征を議す。
五人の宿老、五人の奉行、
中老三名、みな列なりつゝ、
備前の宰相滿坐に代り、
讃辭を呈して異議なく ありき。
十萬貔貅は直ぐ立ちどころ、
艦船七百われ今率きゆ。

（四）

人間　僅かに　百歳　ならず、
快ならざらん　や　無前　の　いくさ。
美々たる　戰袍　われ人　かざり、
金銀　珠玉　の　大刀　佩かしめて、
大軍　肅々　旗幟　を　たゝし、
雞林八道、明洲四百、
遲羅、晨且　をも　一つに　統べば、
やまと　の　言葉　を　西夷　に　擬せん。

（五）

邊境、日本　の　土　のみ　踏んで、
いつまで　祖先　の　武烈　を　瀆す。

京師　は　主上　の　まします　ところ、
豈、うれ、畿内　に　跼蹐せん　や。
叡慮　を　うつして　北京　に　迎へ、
大唐關白　これ　秀次　か。
故國　は　秀家、高麗　には　岐阜　の
宰相　秀信、最も　よけん。

（六）

つゞいて、老將　また　舊臣　の
いさを　に　報いて　國々　取らせ、
宇内　の　形勢　たとへば　春　の
うな原　廣くも　とく　治まらば、

わが身は身づから愛兒を追ふて、
とこ世の御國の神とゞ成らん。
露とも消え行く浮世の中の
のゝみは、ろの他に、また あるべしや。

（七）

元來無物のわが身の上に、
有形の野心は國家の爲めぞ。
限りを知らざるこの あめ地と、
誰れかは空しくながらふべけん。
鶴松三歳をさなく逝いて、
悲痛の靈境われ感じ得ぬ。

清水塔上古今をいたみ、
丈夫の本領その時決す。

（八）

ああ、われ賤しく おひ立ちぬれど、
日輪孕みて產れし子なり。
普天のもと、また率土の濱に、
多年の思を遂げてや止まん。
今上皇帝且上皇に
拜別終はりて、親兵二萬。
文祿元年卯月のなかば、
秀吉來たつてこの社にいのる。

（九）

噫、いつく島がみ、往古に渡り、
潮路を守護する御靈と稱す。
われらが出て行く前軍後備、
靈驗いやちこ あらしめ玉へ。
げに これ仙島、岸うつ波も
心耳を洗つて梵唄の曲。
やがては攻め入る かの むらさき の
龍宮城も ま近し、あら、ありがたや。

（十）

供養の萬燈つき夜の如く、
海上遠くも光はをどる。
百折廻廊舞樂と變じ、
われ また登仙羽化する ものか。
虛空に花ふり、蝶あらはれて、
御代泰平とぞ、歌ひて かなづ。
ほとけの王國、異敎の土にも、
わが目は開らけて、冥福浮ぶ。

（十一）

ああ、われ賤しく おひ立ちぬれど、
日輪孕みて齊れし子なり。

青天のもと、また　率土の濱　に、
多年　の　思　を　遂げでや　止まん。
噫、いつく島がみ、往古　に　渡り、
潮路　を　守護する　御靈と　稱す。
われらが　出て行く　前軍　後備、
靈驗　いやちこ　あらしめ玉へ。

清正望岳賦

朝鮮　北境　いま　早や　盡きて、
攻め入る　あなた　ぞ　かの　兀良哈。
八千騎兵　は　いち城　拔きつ、

貨寶　を　收めて　南に　還る。
追擊胡兵　の　鋒さき　迎へ、
清正　身づから　しんがり　すなり。
時、これ、當年　七月　なかば、
五穀　も　みのらぬ　異邦　の　風よ。
夏　なほ　寒きは、日本刀　の
切れ味　さとつて、靡ける　さま　か。
王子　は　兄弟　俘虜　となり　つ、
知らずや、咸鏡　南部　に　あらん。
無謀　の　しれもの　いのち　を　忘れ、

夜叉上官をば おそひて 來たる。
たやすく あしらひ、且 退きて、
進むは いよいよ 平安道 か。
わが軍 たまたま 道 失ひて、
浪 蒼茫たる 海べ に 出てぬ。
二十重 の しき浪 御空 の 雲 に
つらなる 境 は 如何なる 國 ぞ。
噫、さなきだに、又 征衣 を 着ては、
生れし 故郷 の 戀しき ものを、
見よ、見よ、西南 霞 を 開き、
はるかに 浮べる わが 富士の靈。

譬へば、暗夜 を 迷へる 船 の
北斗 に みよし を 轉ずる 如く、
從ふ 兵士 は 皆 もろ共に
芙蓉 の すがた を 動かぬ 日あて。
將軍 よろこび 馬 より 下り、
かぶと を 脫して、再拜 跪坐す。
『ああ、われ、貴とき 義父、太閤 の
御もと を 半歲 辭し 奉り、
日々 向ふは たゞ 西北 と
思ひし こと こそ 過ち なれや。

遠くも　來にける　われらが　いくさ、
わが　大日本　は　かしこ　の　空ぞ。

『勝利　の　しらせ　を　待つらん　人　の
あり　とし　頼めば、いづこ　の　果も、
われには　聚樂　の　たゞ　あたたかき
御殿　に　同じ』と、かしこみ　起きつ。
再び　馬上に　士　を　見渡せば、
きほひ　は　凛々　あらたに　振ふ。

明使追放

（一）

金箔　粲たる　瓦　を　葺いて。
光明　あまねき　伏見の城　よ。
たたみ　は　千疊　錦　を　かざり、
柱　に　大和　の　古木　ぞ　ひかる。
『殺生闘白』　先年　逝いて、
棄君　この時　僅かに　四歳。
天下　の　大將　平和　を　のぞみ、

こゝ、今、明使を引見すなり。

（三）

毛利の輝元兵士を列ね、二行の護衛は嚴しく ゆたか、警驆靜かに帷幄は開らけ、太閤七士とすまひをただす。正副明使は仰ぎも得せず、人手にすがりて御前に進む。膝行ささぐるその禮物は、金印冕服いかなるしるし。

（三）

天下はよろこび、家康以下に その章服をば おのおの着させ、手づから かむりを おし戴いて、袖ひろごろもの いきほひ揚る。仰せを かしこみ、かの墨染の承兌冊書を讀み上げはじむ。あはれや、冒頭その語に曰く、『なんぢを封じて日本の國王——』

（四）

行長かたへに おののき 懼れ、
列坐の英雄一語を吐かず、
秀吉忽ち まなじり 裂けつ、
徘服は破れて かんむり 飛びぬ。
『われ 今 日本を 手中に 握る、
王位を欲せば 身づから 可なり、
皇統綿々 この 天朝に、
夷狄の 駄言は 以ての外ぞ。

（五）

『ああ、人、われ をば 小猿 と 稱す、
まことに かなへり この わが樣 は。

無禮の文字を得んとて、ここに
なんぢら 風情を 引見 せんや。
惟敬は 奸惡、詐謀を いだき、
明韓 二國を 取りつくろふ か。
攝津は 小才、恥辱を 知らず、
その罪 いづれも 誅死に 當る。

（六）

『阿虎は、直ちに、奉行の衆 と
兩使を 鞭うち、とく 去らしめよ。
方亨、なんぢ は 何 をか 爲さん。
北京に 歸りて、わが意 を 告げよ。

秀吉怒つて大師を出だし、
再び内地に進撃すべし。
朝鮮三道わが目にあらず、
明州四百を屠るは近し。

（七）

『ああ、われ愚なりや。この鬱忿は、
諸公ともろ共、豈忍ばんや。
西南四道の勇士を募り、
明年二月を發途となさん。
秀秋、このたび主將となりて、
秀家、秀元、その副たれよ。

小西は阿虎と先鋒きそひ、
このあやまちをば千古にただせ。』

（八）

金箔粲たる瓦を葺いて、
光明あまねき伏見の城よ。
たたみは千疊錦をかざり、
柱に大和の古木ぞひかる。
數百の兵船、十萬貔貅、
東西四方を意中に收め、
天下の大將媾和を遂げず、
こゝ、今、明使を追放すなり。

蔚山城

大明、諸道の つは者 集め、
三十三將 いきほひ 奢る。
右軍は 芳春、左軍は 如梅、
高策 その間 中軍 ひきゆ。
韓國七將 また 加はりて、
蔚山修築 なかば に 追る。

たまたま 嚴寒。しはすの 空に、
草木 いのち の かをり を 吐かず。
守將は 水路 の 堡寨 に 出で、

城兵 一しほ 土木 に 努む。
土 をば 重ねて 水 盛りかけば、
數丈 の 銀壁 忽ち 成りぬ。

將軍 奮戰 歸ると いへど、
四面 は 全く 敵手 に 落ちつ、
十日 の 籠城、十日 の 飢渴、
牛馬 を 屠つて その數 足らず。
血しほ の 氷 を 碎いて 食みて、
釜山 の 援兵 至る を 待てり。

黑田 の 孝高 梁山 に 在り、

使を發して危急を報ず。
豐臣秀秋諸將を督し、
五萬の騎卒は勇んで進む。
清正さながらその意氣自若。
內外應じて、相合擊す。

敵軍三脇あなみは亂れ、
總督揚鎬今早やいづこ。
夜さむの平原、露營は倒れ、
凱歌の響は千里に渡る。
月色皓々根城と映じ、
殘兵却つて行ゑに迷ふ。

薨去

（一）

六十三歲太閤老いて、
外國いまだに降りを乞はず、
四屯の精兵四城を守り、
その餘は全くまかりて歸る。
七年征役かへり見すれば、
過ぎにし醍醐の豪遊のみか。
花またこの世に散り行く習ひ、

殿下の病はいよいよ篤し。

（三）

この時八月、徳川公を御もとに招きて、のたまひけらく、

『われ、意を果さで、且死に失せば、中將幼弱、世に亂あらん。之をば をさへて鎮めんものは、重鎮、なんぢの外あるべしや。幼兒の行ゑはわれまた問はじ、天下を擧つてながに托す。』

（三）

家康老獪、なほ且おそれ、感佩追つてなんだにむせぶ。

『殿下の百歳萬世の後は、嗣君を奉ぜぬものらぞなけん。よろしく神算、君、運らして、治國のもとゐを遺させ玉へ。われたゞ不才の身は、畏くも、ああ、この重任堪ゆべくもなし。』

（四）

ためらひ　退く　あと　見送りて。
三成　長盛　諫めて　曰く。
『殿下　は　百戰　天下　を　握り、
一朝　他人　に　與ふは　如何に。
諸侯　に　大小　差別　は　あれど、
すべて　は　御恩　に　むせべる　ものぞ。
從二位　の　幼君　まさきく　ませば、
關西　關東　など　叛かん　や。』

（五）

衆議　に　從ひ、すなはち、こゝに、
大老　中老　奉行　を　命じ、

片桐且元、小出　の　播摩、
秀頼　傅　たるに　これ　定まりぬ。
多年　の　老臣　猛將　ども　を
御枕　近くも　皆　召し寄せつ。
『ああ、わが戰　勝ざる　なきも、
今、たゞ、一事　を　遂げずに　逝くか。

（六）

『鬱勃　そびゆる　大樹　の　かげ　も、
えだ葉　を　刻めば　殘るは　幹　ぞ。
魏々たる　いらか　を　支ふる　ものは、
ふとしき立つ　てふ　かの　宮ばしら。

一人天下の重さを成さば、
萬民等しく つどひて 來たる。
見よ、われ 日本の御靈を 受けて、
平和を 世界の 果まで 求む。

（七）

『劒銃、弓矢は 露電に 似たり、
一たび 動けば、歴史と 消えん。
めぐりて 倦まざる 天にも、地にも、
人々 一期の 心は 振ふ。
たとへば この精、うしほの 如く、
滿ち足る 世までは 平らか ならじ。

四民のわづらひ、四民のうれひ、
ああ、半途にして わが手を 免る。

（八）

『明國、わが死を 若し 漏れ聞かば、
或は 大擧の 復讐 あらん。
元冠 以來の 恥辱を 受けば、
われ この 御國に 神さび 得んや。
駿河の 宰相 伏見に 臨み、
必らず 内外 歸趣を 示せ。
六歳 嬰兒は 大坂城に
利家 保ちて、人 たらしめよ。

（九）

『石田よ、淺野よ、とく赴きて。
四城のいくさを收めて歸れ。
二人の宰相そなへに立てば、
追擊何ぞや、おそるに足らず。
十萬兵士を空しく置いて、
あはれや、異境の鬼たらすな』と、
天下の大將一事を遂げず、
千古のうらみをいだいて逝きぬ。

小海祠

天下の訃音を敵漏れ聞いて、
窮鼠のいきほひ却て猛し。
わが軍海路をせきとめられて、
義弘僅かに唐島に入る、
順天守將は南海島の
義智古城にのぼつて守る。

明將劉綎わが船沈め、
入り江を封じて次第に迫る。

釜中の魚たる行長勢は、
暗夜に乘じて闇みをのがれ、
時これ霜月十有九日、
島津と合して名護屋に向ふ。

一兵その名は高宮小八、
端なく後れて、便船を得ず、
濱べにうち出で、その西みなみ、
故郷の空をば空しくながむ。
卑怯の浦人身を遠ざけて、
たゞ攻め寄するはおほ浪ばかり。

小八がよそへる黑革おどし、
よろひは破れてつゞれのまゝに、
やすらふ家なく、食らはん實なく、
なぎなた一つを夜襲の備へ。
あはれや、俊寛、敵地にありて、
風雨は無情の手からを誇る。

韓人わらべはこと更ら避けて、
そのちゝ母らの門戸を出でず、
かの夜叉上官、また石曼子、
武勇の言葉をひそかに偲ぶ。
見よ、見よ、この士は痩せ衰へて。

失せにし その日に わだつみ 荒れぬ。

再び 難事の 返るを 恐れ、
島民 やしろを 小山に 建てつ。
時日を 定めて、あらぶる神の
御魂を 鎮むる 祭をなせど、
歴史は 亂れて、かれ 舜臣の
愍忠海祠の 一つに 數ふ。

下卷

悲戀悲歌

『田戸の海ぬし』の
詩材を給へる婦人に
この著を献す。

悲戀悲歌

三界獨白

(一) 燭のゆらぎ

一

ああ、君、わが愛、悲しさ愛の
御たね を さそひて 春は 過ぎぬ

三月の　樂み、その　悲み　は
若葉　の　かげろふ、野邊　に　過ぎぬ。
うらゝかなる　日は　再び　見えず、
遠き　に　のこる　は　聖堂すがた、
そびゆる　あらゝぎ　時鐘　を　鳴らし、
あした　の　祈禱　に　呼ぶも　恐怖。

二

罪なき　ものら　は　ころも　を　飾り、
こわね　も　高らか　石段　を　のぼり、——

ああ、うらやましき　乙女　の　さまや——
聖母　を　唱へて　席　に　すはり、
やましき　ことなく、隔つる　意なく、
かれら　は　聖式　の　蒸餅　を　取れど、
わが身　や　エヴの子　——　妖蛇　に　捲かれ、
ゆふべ　の　祈禱　も　口　に　出でず。

三

見よ、かの　カイン　は　その弟　を
うらみて　殺せし　罪　に　由りて、

耕す　土　さへ　その果を　擧げず、
流浪の　身　としも　くだちぬれど、
なほ且ゼホヴの　印誌を　給びて、
さすらふ　野邊にも　子をば　得たり。
わが身は　却てわが　分身を、
神にも　見せずて、闇に　遣りぬ。

四

ああ、闇――わが魂なやめる　闇は、
わが目を、閉してわれを　責むる。

こゝろの　窓　よりたまさか　見えて
ひろがる　大地は　聲を　叫び、
血しほに　染みたる　その口　開けて、
わが身を、罪をも、呑まん　と　する。
われには　ゼホヴを　呼ぶ　ちから　なし、
ああ、君、わが身は　尼を　斷念ぬ。

五

一たび　この身に　纏ひはせん　と
のぞみし　黑衣は、こゝろ　包み、

見ぬ子の　かたみの　喪服と　成りて、
わが　苦み　こそ　神と　盡きね。
老いたる　主教は　あまりに　聖く、
親しき　童貞　なみだ　もろし。
光を　受けたる　萬物の　うちに、
この罪　聽く者　ひとり　君ぞ。

六

君より　ひそかに　懺悔を　せよの
招きに　斷食——　朝を　來たり、

をみなの　恥辱をば　おほへる　被衣
白きに　隱れて、　彌撒を　拜す。
たふとき　かをりは　御堂に　滿ちて、
高きを　落ち來る　樂の　ひゞき——
わが魂　うつらに　うれひを　免れ、
まさしく　向ふぞ　神の　御前。

七

ひたすら　唱ふる　誦文の　聲も、
うなじと　もろ共　低く　下だり、

十字を結べる小胸を過ぎて、
わが世は地獄の門にかよふ。
見よ、聖ミカエル、またガブリエル、
魔鬼をば平らげ、道を拓き、
天より招くは耶蘇の御體、
榮光は金色——これや犧牲。

八

『生きたる人、また、死したる人を
糺さん爲めにぞ あもり給ふ……

われらは信せり、この公の
聖會、聖人……罪のゆるし……』
こは聽き慣れてし御聲と知りて、
ふと目をあぐれば、——思はざりき——!
わが君、神父のくらゐにありて、
香臺ひだりにひざまづけり。

九

立ちたり——その御手銀水きよめ、
三つなる ペルソナ いのり念じ、

いのち に 滿ちたる 秘蹟 の 蒸餅 を
これ 聖體 とぞ さゝげ給ふ。
その かうがうしさ、その あらたかさ、——
われらは 思はず かうべ 垂れて、
『十字架 に かゝりし 主 の 肉身 を
をろがみまつる』 と 口 に 誦しつ。

一〇

かれ、また 葡萄 の さかづき 揚げて、
われら に 誦文 を 求め給ふ。

われ はた 唱へぬ、『十字架 の 上に
流させ給へる 御血……』ばかり。
わが 胸、忽ち いたみ に 觸れて、
仰げば 奥なる 燭 は ゆらぎ、
火かげ の もとより 見知らぬ 嬰兒 の
御臺 に あらはれ、『母』 と ゑみぬ。

一一

神父 の すがた ぞ いよいよ 崇く、
夢路 を くゆれる 香 の うちに、

脊なる　十字は　光を　放ち
死すべき人とも　思ひ寄らず。
さながら　キリスト、身づから　來まし、
わが爲め　御壇に　懺悔　聽くか。
マリヤの　御胎は、あゝ、聖かりき——
われ　ゆゑ　わが子　は　闇に　行きぬ。

一二

あゝ、君、わが愛、悲しき愛の
御たねを　さそひて　春は　過ぎぬ。

三月の　樂み、その　悲みは
若葉の　かげろふ、野邊に　過ぎぬ。——
君、聖體をば　分けはじめしも、
わが身は　授かる　價値なくて、
痛傷と　悔悟もて　御堂を　退き、
御空の　もとにて　われを　泣きぬ。

(二) 闇の横木

一

ああ、日は　毛布の　黑みを　帶びて、
月　また　血の　ごと　しぼみ來たり、
あめなる　星々　その軸　もろく、
たとへば　無花果、地　にぞ　落つる。

諸天は　卷き物　おのづと　卷きて、
山々　島々　うつり行きぬ。
わが身は　鉛の　おもりの　如く、
空より　釣られて　闇を　下だる。

二

うづ捲く　黑雲　練りたる　壁と、
わが道　かこみて　魂を　送くる。
刹那　ぞ　五百里、小暗き　坑は
風切る　いきほひ　ひゞく　ばかり。

あまりに　重きは　わが身の　罪か、
悔ゆる　に　ひまなく　鎖　延ぶる　——
かしら　の　黒がみ　さかしに　垂れて、
わが手　も　便なく、落つる　速し。

三

わが息　殆ど　胸　より　絶えて、
血しほ　は　むらがる　眉　の　あたり、
忽ち　觸れたる　横木　を　握り、
之にぞ　すがりて　助け　呼びぬ。

と見れば、鐵門　の　なかば　は　引けて、
ひらめく　鬼火　に——『あはれ、わが身、
着慣れぬ　ころも　の　薄き　を　纏ひ、——
こは、早や、他界　の　すがた　なるか。』

四

かくこそ　叫びて、思はず　泣けば、
『さなり』と　闇　より　答へ　聽ゆ。
『いまし　ぞ　ゼゼベル、淫婦　の　友　よ。
額　に　神より　印　受けず、

第二の滅亡に　これより　入れや。

來たれ』と、くろがね　戸びら　軋り、

いろ　青ざめたる　馬の脊　高く

乘れる　は　利鎌　の　黑き死　なり。

五

口　より　出づるは　火　と　その烟、

硫黄　の　にほひ　ぞ　燃ねて　のぼる。

陰府、その　うしろ　に　つき從ひて、

わが目　を　掠むる　つるぎ　あまた。

眞近く　起りし　もゝいかづち　の

どよみ　は　奈落　の　底に　消ねつ。

あらたに　叫びて、惡魔　の　むれ　の

寄せ來る　地鳴　ぞ　胸　に　ひゞく。

六

われ、身　を　もだねて、すがれる　棒　こそ、

さながら　裁判　の　塲　をや　限る。——

『よみ　なる　判宮　よ、わが　死の神　よ、

しばし　の　いのち　を　許し給へ。

求むる物　あり、われ、そを　追ひて、
來りぬ　この闇、暗き　坑に。
ああ、かの　失せにし　玉だに　得なば
わが身は　陶器、碎く　まゝぞ。』

七

馬の脊　聲　あり。『おろかや、いまし、
求むる　玉には　惡魔　まとふ。
邪淫　の　つちくれ　さは　戀しくば、
來たりて　サタン　の　胎内　に　入れや。

かれ　こそ　赤龍、かたちは　見せず、
なやめる　いまし　を　近く　かこみ、
或夜　ぞ　ひそかに、産む　をも　待たず、
なが兒　を　奪ひて　食ひ去りぬ。』

八

『ゆるせや、見ぬ子　よ、さりとは　知らず——
のろひ　は　免れじ——　放ち遣りぬ。
ああ、われ、誰れ　にか　そを　訴へん、
神より　離れて　のぞみ　盡きぬ。

第一、第二の天使よ、來たり、
終末の管をば高く鳴らせ。
汝が手に燃ゑ立つ火焔を浴びて、
わが身も草木と燒けて失せん。

九

『第三天使の喇叭よ。ひゞけ。
御星の茵蔯、とくも隕ちよ。
われ、汝が苦きに身を投げ入れて、
河水もろともほろび行かん。

ああ、この靈魂とく滅びずば、
深き罪を。
いかでか あがなふ
ああ、われ、誰れにか そを訴へん、
神より離れて のぞみ盡きぬ。』

一〇

物云ふ力も おのづと ゆるみ、
すがれる横木を落ちん時し、
わが身を受くべき魔鬼等は失せて、
奇くも やわらぐ胸の おそれ。

この時、『しばし』と、この坑開らけ、
うへより さし來る 光見えつ。
聖母の御すがた いと笑ましげに、
わが手を取りて ぞ 熱き なみだ——

二

『若葉は朽ちしも、その靈魂は
ながに活く』とぞ、あはれ、御母。
わが身は引かれて みどりの雲に、
こゝろも輕らか 空をのぼる。——

ああ、君、わが愛、愛しき愛は、
住む世を異にし、いよよ增る。
ときわの樹かげのいづみを汲みて、
また會ふ時をし われは待たん。

(三) ときわの泉

一

物みな　新たの　いのち　を　帶びて、
御空　の　上なる　清き　住まひ――
夜なき　國　には　ともし火　つけず、
日　は　わが　かんむり、おもて　照し。

十二　の　星々　また、き　止みて、
ちさき　は　花がた、胸　を　飾る。
わが身　も　聖徒　の　御數　に　入りて、
無縫　の　細布　白き　給びぬ。

二

赦免　を　受けたる　をみな　の　凡て、
こゝには　稚き　愛　の　すがた。
マナ　より　あまき　は　その　物語り、
宿世　の　記臆　は　夢　の　如し。

等しく　光の　白衣を　まとひ、
金沙の　御庭に　群るゝ　さまは、
たとへば　遠野に　あまたの　羊、
かすみて　浮べる　脊なに　似たり。

三

あまたの　羊の　飼ひ主、神の
御さかえ　照り添ふ　宮に　あれば、
わが身も　溢るゝ　めぐみを　浴びて、
楽しき　とこ春　晝を　去らず。

たまたま、凝りにし　くれなゐ雲の
花びら　一つを　足に　踏みて、
奇しくも　ゆらげる　平和の　袖に、
感せし　ひゞきは　天の　あなた。

四

ああ、その響を　追ひ行く　魂の
羽根より　燃え立つ　ほのほ　見えて、
わが手に　生命の　樹かげを　汲めど、
なほ且　寂しみ　涌きぞ來たる。——

上には　みどりの　あや虹　渡り、
下には　あを海　玻璃の　男波、
その　透き通れる　岸邊を、ひとり、
心は　戀しき　君に　かよふ。

五

あゝ、君、わが愛、悲しき　愛の
きづなに　引かれて　懸る　地球にや、
ちいさき　バアルの　偶像の　如く、
熱なく　回りて　聞く　垂る丶。

さは云へ、宗教の　御光　しるく、
わが目に　見ゆる　はもとの　聖堂。
黄金の　香爐に　キリスマ　焚いて、
君、なほ　いますか　——　遠き　御聲。

六

あまたの　悔い　ある　もの等　の　爲めに
十字架　の　道行き、彌撒　の　いのり、
御壇　に　焚く香　の　けむり　と　共に
纖弱に　のぼりて　あめ　に　聽ゆ。

ああ、その聲　こそ　一條　長く、
風　なく　顫へて　胸　に　ひゞけ。
來たれや、わが愛、小鳩　の　如く、
眞白き　御羽根　に　罪　を　打ちて。

七

わが手　は　待つ　なり、卷くべき　君　を。
わが身　は　待つ　なり、いだく　君　を。
一たび　心　に　しるせし　影　は、
いつまで　相見ず　居らるべき　ぞ。

亡ぶる　ことなき　わが魂　ならば、
いつまで　空しく　過すべき　ぞ。
御神　は　ゆるさん、心　と　心、
影　また　影　とし　會はん　時　を。

八

『祈禱　の　うちには　わが愛　あり』と、
君　は　も　下界　に　歌ひ給ふ——
その愛、その君、今　幾萬里、
へだつる　わが身　の　聲　も　聽くや。

『祈禱のうちには　生命を寄す』と、
君はも　下界に　仰ぎ給ふ――
いのちよ、わが君、今　幾億里、
へだつる　わが身の　聲も　聽くや。

九

ああ、君、わが愛、悲しき　愛は、
主の日ぞ　來らば、報　得べし。
七の　封印　六つ　まで　開らけ、
とく　その　あめ地　消えも行けや。

ちいさき　バアルの　偶像の　如く、
熱なく　回りて　垂るゝ　地球　こそ、
その時　全く　かげなく　失せて、
君はも　御空に　來ますべきを。

血ぬれる鐘

『いかで、おきなよ、われ等ふたり、
花見がてらのおもひ出に、
春もものどかの空に高く
古き鐘をば撞かしめよ、
いかで、おきな。』

『いかで、――おろかや、君は醉へり。
さくら棚引くうらゝ日も、
われは目醒めて、うつる時を
かぞへ居れば ぞ、みやこ人、
ほろび近し。』

聽いて、暫しは、めをと ふたり
目をば見かはし震ひしが、
聲もをみなはあだに笑みつ。
『されば、生れも來たるもの

さわに　あるを。』

『さなり、生るゝ　子等　も　あれど、
死ぬる　ものら　は　歸り來ず。
若き　乙女　の　かほ　に　見えて、
つひに　隱るゝ　いろ香　こそ、
これや　ほだし。』——

『これや　ほだし』と、醉へる　をのこ
手　もて　をみな　の　肩　に　觸れ、

『などて　おきな　は　斯くも　沈み、
あまき　さかづき　受けやせぬ——
鐘　を　撞けよ。』

『さなり、刹那　は　死　をば　呼びて、
鐘　ぞ　鳴る時　やがて　來ん。
若き　をのこ　の　胸　に　燃えて、
つひに　ひろがる　ねたみ　こそ、
これや　おそれ。』

『いかで、おきな』と、めをと　ふたり
　撞き　に　迫れば、その前　を
低き　うなり　の　聲　ぞ　過ぎて、
　かれは　忽ち　夜叉　の　ごと
　狂ひ立ちつ。

『待て』と　遮ぎる　さまに　おぢて、
　かれら　ふたり　は　退きつ。
『許せ、おきな　よ、無禮げ　なりき――
こはも　何ゆゑ　世には　斯く

よき音　出だす。』

『さらば、君よ』と、こゝろ　解けて、
　かれは　語れり。『この鐘　は――
云ふも　苦しや――　われに　生命、
　あはれ、わが戀、わが　おそれ、
　　これや　わが世。

『君よ、三十とせ　むかし　なりき、
　われは　山門――　寺をとこ、

妻に親しき小姓ありて、
われは之をば疑ひぬ——
若き時ぞ。

『時の小姓は今や智識、
名ある御寺を領ずれど、
けがれ無き身の德に照れる
眉間に傷あり。——われこそは
罪ぞ深き。

『妻はいたはし、こゝに走り、
此世のわかれを苦しみつ。
血もて無罪をこれの裏に
しるし終はりて、われを見き——
斯くは云ひぬ。

『「君はこれよりわれをまもり、
朝な夕なの鐘を撞け。
人に知らるゝ時し來なば、
いのちなき身と思へよ」と、

これや　わが世。

『晝の光を　闇に　つゝみ、
罪の根　のみは　はびこりつ。
わが　まぼろしの　影ぞ　薄く、
響く　おとにも　おそれ　あり——
われは　老いぬ。

『されど、寂しき　脈に　さへも
今や　むかしの　血は　湧きぬ。

若き　いましの　すがた　見ては、
またも　わが身の　春は　來ぬ。——
こゝろ　苦し。

『むしろ　死ぬるに　よきは　今日ぞ、
われは　最後の　かね　撞かん』——
低き　うなりの　聲ぞ　來たり、
かれは　忽ち　夜叉の　ごと、
狂ひ立ちつ。

『待て』と、身づから返り見つゝ、
めをと ふたり を ためらひて、
『君は この塲 を のがれ給へ ——
わが身 苦む さま を こそ
遠く 聽けや。』

＊＊ ＊＊ ＊＊ ＊＊

鐘は ひゞきぬ、春の ゆふべ、
花の ふゞき を 散らしつゝ。

鐘は ひゞきぬ、春の床 を
醉へる 人ら の 歸る 時 ——
かれは 如何に。

『あはれ、お竹よ、けふ を 共に
この世 離れん、さらば ぞ』と、
一つ 撞きては 胸 を もだえ、
二つ 撞きては 身 を もだえ、——
まろび 伏しぬ。

＊＊　＊＊　＊＊　＊＊

あくるあしたの花の夢を
覺ますひゞきは聽え來す。
あはれ、もろきは血しほのみか、
さしも名高き唐かねも
朽ちてありき。

田戸の海ぬし

一

田戸に山崎、
また堀の内、
走り水にも、
また大津にも、
春のうしほは
朝ゆふ寄せて、

けむる　霞　の
奥　より　見ゆる、
淡き　猿島、
島　とは　云へど、
田戸　の　おやぢが
巣　に　こそ　似たれ。

二

おやぢ、頬赧の
かほ　むき出して、

鬢　の　ほつれ毛
二すぢ　三すぢ、
風　に　もまるゝ、
小舟　の　上　を、
あさ　は　沖　より、
岸　より　ゆふ　は、
かろく　あま飛ぶ
小鳥　の　如く、
しゅッしゅ　漕ぐ手　の
手なみ　も　速し。

三

おやぢ、その名は
猪ノ助ぬし よ、
海に 生れて、
海をぞ 戀ふる。
妻はあれども、
また 娘は あれど、
ありし むかしの
血氣の 名殘。

ゆるし 得ぬ 子を
お濱に 抱かせ、
かれは 寂しき
おもひに 浮ぶ。

四

妻のおやぢは
七九に 失せて、
今は その子も
死ぬべき 時を、

一つ軒端に
おなじの住まひ、
もとの仲にも
返らば返れ、
二十三年
共には住めど、
ひとりびとりの
むしろを褥。

五

上總、房州、
かすみに醒めて、
曉の ひかりに
猿島浮けば、
おやぢ頬赧の
かほ むき出して、
またも きのふの
舟唄 あはれ。
しゆッしゆ 漕ぐ手の
手なみを見せて、

田戸と島との
わたしを通ふ。

六

過ぎし時代の
ちよん髷結ふて、
鬢のほつれ毛
二すぢ三すぢ。
おやぢ、もとより
その歳知らず。

問へば、『わが身は
死ぬことなし』と。
浦の人々
うやまひ懼れ、
田戸の海ぬし、
こはその稱へ。

七

むすめお絹が
世を知りそめて、

父母の仲をば
返すとすれど、
母は寂しく
縫ひ物つゞけ、
『あれは龍宮の
いたづら小僧。』——
猪ノも笑みつゝ、
かたへに立ちて、
『されば——汝が父
身は海坊主。』

高地の靈語

ああ、造化の一角なる
二百零三高地よ、
識あつて待ちしか、この
非情非理の亂り世。
人は文明たゝへて、
あまき酒にほろ醉ふ。

されど、なれは血に醒め、
闇の如く寂寥。

うちにつゝむ地熱の
深き光かすめつ、
ひとり寒威零度の
空に高くそびえつ。

脊には死屍かさなり、
谷は人の腹わた、

雪に赤く染まるは
うちし敵とその仇。

野犬こゝに來たりて、
性を更へしおほかみ、
凍る肉を食みても、
誰れを恨むこの民。

のろひ多き罪をば、
嗟、なまぐさく吹く風。

われは　之に　乘りて　ぞ
渡り來ぬる　死の畔。

骨と　骨の　間に
祝ひ　の　種　播きたり、
肉と　肉の　間に
蒴ゆる　種　を　播きたり。

百年　劫果　含めて
あざり行かん　その種、

とこしなへに　新たの
生命　延さん　その羽根。

嗟、再びは　のろはで、
風よ、北に　舞ひ行け。
われは　邂明　の　靈　なり、
西に　こそは　のび行け。

さらば、高地——わが　乘る
駒　は　ひかる　あけぼの、

遠く　進む　すがたを
今ぞ　見よや、ほのぼの。

旭日吟

（遊子、故郷の濱邊に立ちて）

（一）

あゝ、とこしへの　朝日子よ。
緑　したゝる　松原に、
あしたの　浪を　かき分けて、
登るすがたの　勇ましき

われも　初めて、朝がすむ
けしき　ぞ　いとも　麗はしく、
この世に　生れ來し　時は、
かくや　いきほひ　猛りけん。

ちから　限りに　泣く聲　の
いづる　涙に　うれひ　なく、
自由に　めぐる　ひとみ　には
ちりも　穢れ　は　とゞまらず。

五感　の　もとゐ　明らかに、
まよひ　の　風　の　吹き立たず、
母の　乳ぶさ　に　口　觸れて、
清き　いのち　を　呼吸しつ。

いはひ、よろこび、樂み　の
うちに　育ちし　そのさま　は、
なが　み光　の　まのあたり
いや增す　ごとく　ありにけん。

（二）

ああ、とこしへの朝日子よ。
綠したゝる松原に、
あしたの浪をかき分けて、
登るすがたの勇ましき。
われ學問をならひ初め、
ふみ讀む机前にして、

夕べに至るその頃は、
かくやたゆまで勉めけん。
ころもを振ふ千仞の
岡を觀じて意氣高く、
この大丈夫足洗ふ
萬里の流れ身に秘めつ。
人は云ふてふ螢雪の
たとへも愚か、夜更けて、

鳥の　啼く音に　ほゝゑみ　の
かげ　もの云はゞ、如何なりき。

心の　うちに　のぞみ　あり、
身の　苦み　を　ことゝせず。
學の道　に　さち　ありて、
胸に　まゝひの　ひま　出でず。

たゞ　一すぢに　わがちから
進み行く　世の　樂み　は、

なれが　日足　の　すぎすぎに
とよさか登る　さま　に　こそ。

（三）

ああ、さりながら、朝日子　も
高き　に　つれて　名　を　得じや。
ああ、朝日子　も　曇りなば、
深き　あはれ　の　動かじや。

戀と名譽の二すぢに
わが道分れ入りてより、
われ疑ひをいだき初め、
われ悲みを感じ來ぬ。

（四）

われ初戀を知りそめて
若き血しほに觸れてより、
もゆる思はあめつちの

果にも渡るこゝ地しつ。
われには餘る苦みを
詩にも歌にも歌へども、
胸に秘めたる一たまの
たから示さん折失せつ。
その麗はしきをとめ子の
行ゑ追ひつゝ、幾歳か、
嘆く目あてのなきまゝに、

そは　只　おなじ　箱　なりき。
再び　めぐり會ふ　日　きへ、
ありし　昔は　語れども、
わが寶　こそ　奥深く
ひそみて　光　なかりけれ。
然れど、ひそかに　取り出でゝ
放てば、闇　も　かゞやき　の
風　に　吹れて、絶壁　や

高き　をとめ　の　立てる　見ゆ。
呼べど、答へず。ほゝゑめど、
かれ　喜び　の　色　見えず。
ああ、まぼろし　か、足引　の
山　の　ふもと　ゆ　崩れつゝ。
ひらめく　袖　は　薄がすみ
あかき　に　消えて　うつり行き、
浪立つ　髪　は　青雲　の

白き　御空　に　かげ　も　なし。

ああ、われ　なやむ　もの　なりや、
こゝろ　の　平和　絶えて　なし。
ああ、わが思　深うして、
擾む　は　熱き　夢　ばかり。

（五）

われ　名　を　求めそめて　より、

空しく　爰に　年　を　経つ。
秦　の　始皇　が　英略　も、
われには　靴　の　塵　と　見え。

三千　宮女　亡びては、
野中　の　花　と　いづれ　ぞや。
萬里　の　城　も　くづほれて、
下行く　水　と　また　いづれ。

ああ、アルプス　の　高き　より

敵の平野を見おろして、
おのが立ち場の雪を蹴つ、
うちほゝゑみし ナポレオン。

ウォータルロー草茂く、
吊ふ虫の音にも聽け。
英雄、ひと日、雲晴れて、
セントヘレナの月如何に。
消えて殘るを「名」と云へど、

ありて實なき これ如何。
老子一たび「無」を叫び、
姿を深くつゝみけり。

ああ、功名にあくがれて、
われは迷ひしこともあり。
頓悟の域に身を入れて、
さとると見えし時もあり。

（六）

ああ、疑ひの なかりせば、
如何に 樂しき 世 なりけん。
ああ、悲しみの かげ なくば、
如何に うれしき われ ならん。

さばれ、樂しと 云ふ ものゝ、
亡び行くべく 定まらば、

うれしと 見ゆる その事 の
つひに 消ゆべき ものならば、

見よ、夏草 の 生ひ立てど、
露 の もろきに 就くごとく、
わが 疑ひ と 悲しみ の
長き を むしろ いのち なり。

「無限」の 池 に 石 投げて
面に ひろがる さゞ浪 の、

一輪　一輪に　亂れ來て
「われ」てふ　ものは　拾ひ得ず。

（七）

ああ、朝日子よ、とこしへに
若き姿ぞ　麗はしき。
われは　わが身を　求めつゝ、
かくも　心は　うつろひぬ。

うつる　心に　且は又
「死」てふ　なやみの　加はりつ、
東西　光　うすらぎて、
南北　闇に　消えん　とす。

さびしく　立ちて　夕風の
そよぐ　に　まかす　墓　ならで、
戀も　名譽も　疑も
やすらに　受くる　神　なきや。

(八)

ああ、われ、今や、故郷の
濱邊に立ちて もの思へば、
昔ながらの あけぼのに
わが魂は 湯あみしつ。

千重への男波を かき分けて、
靜かに 登る 朝日子よ。

無限の亂れ 引きまとめ、
われを 圓きに 就かしめよ。

伊吹の螢

伊吹山　木々　失せて、
　生ゆる　草葉　短し。
夏の　夜風に　しめり、
　煙草の　火も　冷たし。

けむり　直ぐ　消ゆれども、
　消えず　殘る　光よ。

時に　後れし　ほたる、
　あはれ、重く　飛ぶ　見よ。

さかりは　十日　過ぎぬ、
　名ある　宇治に　石山。
おのが　同士と　別れ、
　いかで　寒き　この山。

何に　こがれて、斯る
　こゝろ細き　さまよひ。

わが身はじめて　愛しき
なれを　見たり、この宵。

暗き　ともし火　つけて、
風　に　なやむ　その　樣、
ふわり、ふわり　と　靡く、
二つ　三つ　の　人魂。

恨み　ある　ものとせば、
後生　の　爲め、くよくよ、

こゝに　ことづて　すとや、
わが　頭上　を　渡るよ。

さらば、無言　の　身　こそ、
われに　寄する　なが骨。
あはれ、露　には　痩せて、
高き　を　慕ふ　こゝろ根。

螢を踏みつぶせる杵に

風に涼しき夜なか、
粟津が原のみちへ、
かげも撰ばでとまる
ほたる、何のいけにへ。
病めるものならば、右、
ひだり、流れもあるを。

廣き まなかに出でゝ、
犬に食はる生うを。
小さき その羽根折れて、
飛ぶに苦しくば、また、
草葉に逃るべきを。
投げて、蛇の腹わた。
無駄に亡べと、よもやゝ
神もつくり置かざらん。

觸るゝを避けて、ともす
その火、頼む爲めならん。

それも罪なき蟲に、
噫、入らぬ取越し苦勞。
之を憐む味かた、
敵となりしを吊らう。

高き わが下駄の齒に、
松を漏れて生き死ぬ、

月の光を踏まで、
あはれ、なれをつぶしぬ。

雲翩々

ああ、翩々として飛ぶ雲の
妙なるさまを仰ぎ見て、
速きあらしの袖漏れし、
わが身の行ゑ思ふかな。

見よ、見よ。
古人も歌ふ「はたて」さへ

ちぎれ、ちぎれて、また別の
形を浮ぶその色や、
濃きを逃れて、風足の
薄き端には光あり。

いや白きそのひかり、
照らすがまゝに染りつゝ、
一朶一朶に入れかはり、
また立ちかはる、そのかげの
先きを爭ひ走れども、

一歩はづせば、幾萬里――
それ　幾萬里、青き空。

如何なる　靈　の　乘るなれば、
かく　安らかに　渡る　ぞや。
われは　片羽　を　うち折りて、
胸に　憩ひ　の　かげも　なく、
上に　向ひて　あせれども、――
あせる　ほど、遠ざかる。

ああ、手は　亡び、足　亡び、
からだ　は　亡び失する　時、
雲よ、ながごと、白妙　の
のぞみ　や　われも　分ち得ん。

常世の光

（グリュックの『ダイアナ讃歌』の曲に合せて新たに作れる）

あめ地　初めて　二つに　分れ、
御空　を　踊りて　照り出でたる　光。
とこ世　の　おもて　を　籠めたる　闇　は、
音なく　破れて　かゞやき渡り、
四隅　は　新たに　くらゐ　を　定め、
よろづの物　皆　生命　を　浴びぬ——
あめ地　初めて　二つ　に　分れ、

御空　を　踊りて　照り出でたる　光。
静けき　とこ闇　おのづと　破れ、
御空　を　踊りて　照り出でたる　光、
御神　の　夢　より　漏れたる　笑み　の
くらき　が　中をや　かゞやき渡る。
物　皆　新たに　形状　を　受けて、
生命　の　流れ　は　四隅　に　振ふ——
あめ地　初めて　二つ　に　分れ、
御空　を　踊りて　照り出でたる　光。

ねむりは醒めたり

ねむりは醒めたり、わが國民よ、
千歳つたはる御稜威を仰げ。
けはしき山々、するどき流、
どよめく わだつみ、かすめる野原、
皆呼ぶ、皆呼ぶ、わが日の本を。

ねむりは醒めたり、わが國民よ、

二千代重なる榮えを開らけ。
家國のうれひも、そのわづらひも、
われらが希望も、はたいきほひも、
皆呼ぶ、皆呼ぶ、わが日の本を。

ねむりは醒めたり、わが國民よ、
三千とせ鍛へし歴史を振へ。
世界の文明なやめるひまに、
われらが理想も、はた藝術も、
皆呼ぶ、皆呼ぶ、わが日の本を。

進むは　生命、拓くは　いのち、
皇祖の　御教へ　そのうちに　あり。
一つの　言葉に　不易の　御門、
國是の　發展　この民に　あり。
皆　呼ぶ、皆　呼ぶ、わが　日の本　を。

われらが　日に　日に　求むる　ものは、
劒　に　あらざる　御靈の　光。
常世を　貫く　ちから　に　依りて、

仁義の　寶　を　亞細亞　に　護せん。
皆　呼ぶ、皆　呼ぶ、わが　日の本　を。

ねむりは　醒めたり、わが　國民　よ、
三千とせ　鍛へし　歴史　を　振へ。
世界の　文明　なやめる　ひまに、
われらが　理想　も、はた　藝術　も、
皆　呼ぶ、皆　呼ぶ、わが　日の本　を。

短曲

（二十一篇）

一　海の響

夢は　おぼろの　花の　如く
咲きて　見ゆれば、冬の床　も、
ゆふべ　寂しき　海を　出でゝ、
龍の　宮居の　玉座　なりき。
ねむり、南に　かしら　沈め、
沈む　かしら　に　香ぞ　かゝる。
肌に　つめたき　絹の　さわり——

これや　寂ざめの　かをり　遺す。
ひとり　あたゝか　胸の　うれひ、
臥して、聽ゆる　濱を　たどり、
ものに　醉ひたる　乙女すがた、
いとも　しなやか　浪ぞ　寄する。
あはれ、かくこそ　死にも　入らめ——
海の　ひゞき　よ、永劫の　おもひ。

二　無言の石

云はず、語らぬ　石を　いだき、
われは　この世を　泣きに　泣きぬ。
人の　いふなる　戀に　あらず、
おのが　受けたる　苦にも　あらず。

苦にも、戀にも　更らに　增して、
胸の　さびしみ　あふれ來なば、

もゆる　思ひの　皮は　燒けて、
なみだ　ばかりぞ　熱く　流る。

われに　神なく、且は　死なく、
ありと　いふべき　この　かなしみ、
今や　生命の　糧と　なりて、
つきぬ　わが世は　石と　共ぞ。

かれは『無言』を　絕えず　生めば、
われは　なみだを　そゝぎ繼がん。

三　自然のあゆみ

岩を　めぐりて　行くは　何ぞ、
河つ姫　にや、河つ男　にや。
音は　立つれど　すがた　見せず、
見せぬ　すがた　の　裳裾　觸れて、
こゝに　白ぎぬ　あと　を　引くや。
行けよ、流れよ、はやき水　の

澄みて　盡させぬ　深き道　を——
自然　の　あゆみ　も　斯くぞ　あらん。
われは　物もひ　立ちて　居れば、
目　には　靜かの　かげ　も　浮きて、
身　さへ　もろ共　岩　を　めぐり、
隱れ　去るらん　こゝ　ち　すなり。
岩　を　めぐりて　行くは　何ぞ、
河つ姫　にや、河つ男　にや。

四　殘る憂ひ

われは　高き　磯邊　の
岩　に　よりて　默せり、
遠つ海　の　疾風　の
音　に、日　さへ　かげれり。
こゝろ　こそは　この胸
深く　照らす　眞帆船。

馳ける　道　に　一すぢ
殘る　うれひ　悲み、
白く　曳いて　消え行く
天靈　の　跡　ぞ　身　に　入み、
われの　顏ひ　おのゝく
肉　を　破る　寂しみ。

あはれ、立てよ、わが魂、
なれ　の　領　ぞ　この濱。

五　細き指輪

ほそき　指輪の　ぬし　は　あらん、
君は　御手　をば　固く　まもり、
大理石　もて　成れる　如く、
人の　觸るゝ　を　い避け給ふ。
うべや、ゆかしく　歌ふ　譜　には、
高き　しらべ　の　籠る　見えて、
海の　四方　より　渡る　風　も

こゝに　合唱　の　あまつ　樂座。
君よ、御空　に　戀　は　すとも、
しばし　眞砂　の　上に　坐はれ。
春　の　かげろふ　はゆく　燃えて、
白き　砂　にも　熱　は　ある　を——
いづれ　卷かるゝ　身　にし　あらば、
來たれ、ひとしく　あつき　胸　に。

六　夢の子

あはれ、わが身の戀を云はゞ、
色は紫紐のとばり深く、
奥は紙燭の火かげ暗く、
胸のほのほの燃ゆる上を
すぐる夢の子――あと を向きて、
「來たれ、いまし」と、ひそか聲の
なほも小暗く、深き奥に、

身をば糸もて引くに似たり。
されど、覺むれば、朝のひかり
窓にわが身のねむり吸ひて、
いとも樂しき夜間のおもひ
晝はかわける世こそわぶれ。――
君にあかるき定命ありて、
われはこをしもうつし得じな。

七　薫ゆる火かげ

ともし火　もてる　は　如何なる　子　ぞや。
闇夜　の　あらし　に　ゆらぎて　立てど、
なほ且　その影　大地　に　投げず。
照らす　は　世の様、世の　有様　の
朗なる　ほろび　と、その　かなしみ　と、
沈める　いのち　の　流れ　と　愛　や。
當世　を　つらぬく　光　の　すゑ　の、

漏れ來て、あたりに　くゆるよ、火かげ。
聖なる　御堂　の　神壇　に　載れば、
或は　教職　キリスマ　焚いて、
十字架　を　導く　春な　にも　照らん。
さは云へ、こは　また　移し　も　得じな。——
ともし火　もてる　は　如何なる　子　ぞや、
闇夜　の　あらし　に　ゆらぎて　立てり。

八　とはの寂しみ

夢に　地獄を　深く　探り、
奇しき　ともし火　われは　得たり。
ほのほ、うれひの　色に　照りて、
あをき　光は　死をぞ　招く。
聖き　御山の　堂に　燃えて、
世々に　傳はる　それの　如く、

永劫の　さびしみ　こゝに　引きて、
暗く　そのかげ　ゆるゝ　のみぞ。
すゞろ　運びて、此世に　取れば、
活ける　そよ風　照り　を　増しつ。
佛龕の　御佛　いのち　映えて、
われは　おのづと　合掌　なしぬ。
夢は　さめたり　——　されど、いまだ
君は　わが身に　いのち　投げず。

九　槿の木

傳教大師が印度の地より得來てし槿の木、根を一もとの枝葉は高きに繁りてあれど、その幹なかばも、その根のもとも、寂しや、分身の若芽を斷ちて、たとへば英雄子なきが如く、天台教理を絶する如し。

藏、通、別、圓、四教のうちに
三千寺坊のかげさへ消えて、
今はたいづくに昔を訪はん。
大帥が入淨以來のをしへ、
高きを遺して、利機をば生まず。
あはれや、槿の木、御山に ひとり、
法燈暗きを護るに似たり。

十　小暗き道

われは　夢　見ぬ　―　君　と　ふたり、
つらき　無言　の　裏　を　いだき、
胸　の　奥なる　熱　に　觸れて、
深き　眞洞　の　底　に　落ちつ。

うすく　ほのめく　燈火影　に
前の　御かほ　ぞ　―　いかに、あはれ―

いとも　白けて、ねむる　いき　も
既に　絶ねたる　身ざま、死ざま。

膝　に　つめたき　むくろ　一つ、
重き　呼吸　は　身　にも　迫る。
上　を　仰げば、黑き石　の、
『罪』　と　叫びて、おほひ下だる。

さなり、わが魂、これを　避けて、
なほも　小暗き　道　を　戀ふる。

十一　まとふ怖れ

われは　夢見ぬ　――　海の上　を
君　と　二人　し　蛇　に　巻かれ、
舟　と　もろ共　深み空　の
あをき　最中　に　呑まれ行くよ。

力ある　胸　浪　と　どよみ、
熱き　こゝろ　は　雲　と　振ふ。

われに　君　こそ　斯くて　あらば、
まとふ　おそれ　の　何か　あらん。

舟や　かたむけ、潮よ　來たれ、
なほも　海へ　かたく　巻けよ。
おなじ　燃え立つ　火焔　あげて、
呑めよ、下せよ、沈む　身等　を――

あはれ、安かれ、君　の　かげ　は
われぞ　死　までも　送り行かん。

十二　うれひ一すぢ

鐵のうるしを練りし壁と
固くとぢたる、闇を破り
曉の光の照らす如く、
わが身胸よりつらぬかれて、
いだく希望はけふも亡び、
うれひ一すぢ流れ去りぬ。

ながれ去りにし うれひ なれど、
またも覺むれば、またも來たり、
沈む こゝろの目には見えて、
遠く地平の線に渡る。——
君はかくこそわれを引きて、
ひろき この世の野邊に住むや。

われに流れて入るか、去るか——
うれひ一すぢ、今はいのち。

十三　時劫の森かげ

時劫の森かげ　露は　しとゞ、
わが　おほ御神の　足を　受けず、
重なる　落葉の　下行く　水は、
岩をば　めぐりて　人を　刻む。

小暗き　うちより　かしら　見えて、
無言は　その世を　つゝむ時　し、

重なる　落葉の　ゆらぎと　共に、
延びたり　大なる　右手と　左手。

身づから　その手を　樹には　かけて、
見よ、立ち上れり　石の　すがた。
あらくれ男の　胸　いと廣く、
常世の　風をば　こゝに　汲ひぬ。

ああ、かれ、戀　なく、苦み　なくに、
はじめて　この世に　出でん　と　するか。

十四　いさゝ聲

重く　垂れたる　おのが　髪を
取れば、『母よ』と　いさゝ聲の
脅な　を　めぐりて、膝に　下だり、
酷き　こゝろの　目には　見えて、
兒等の　うす影　胸を　纏ふ。
打てど、拂へど、數を　知らず。

神の　アバドン、蝗　率ゐ、
爐なる　けむりに　涌くが　如く、
宿世　來世の　風に　乘りて、
つぎへ　つぎへ　と　群るゝ　影に、
おそれ　おのゝく、寂し　ゆふべ。

かれは　をみな　と　生れ出でゝ、
產まず、生れぬ　刹那　追へど、
なほも　等しく　產の苦　あり。

十五　鍵を與へよ

鍵を　與へよ、陰府の　鍵を。
いづれ　死ぬべき　ものゝ　身　もて、
われは　あめなる　門を　戀ひず。

あめに　空しく　君を　入れて、
清き　天使を　見なん　よりも、
あめに　空しく　君に　連れて、

清き　天使　と　ならん　よりも、
われら　諸共　身　を　投げて、
暗き　眞洞　に　沈み行かん。

鍵　を　與へよ、陰府の　鍵　を。
われら　いち度も　二度も　死にて、
胸　の　うれひ　を　深うしなば、
雲　の　消えては　見ゆる　如く、
戀　の　記臆　ぞ　朽ちず　あらん。

十六　鏡を碎けよ

鏡を碎けよ、わが姉、妹、
映れる　すがたは　皆　穢れたり。
世に　戀　ありとは　心　の　まよひ、
振り袖　重き　を　左手　に　取りて、
その身　の　穢れ　を　飽くまで　泣けや。
なが夫、なが戀、なが　依る　はしら、
いづれも　右手　には　遠き　を　引いて、

近き　は　夜る　の　戸、空しき　むくろ。
仇なる　小夢　に　醉ひたる　この世、
誰れ　をか　恨みん、をみな　の　魂　よ。
酒の香　高き　に　口づけ　すとも、
醒むれば　あした　の　むくろ　と　むくろ。
鏡　を　碎けよ、わが姉、妹、
映れる　すがた　は　皆　穢れたり。

十七　蛇の河姥

むかし　この石　天を　落ちて、
此世の　小春に　目をば　覺めぬ。
へびの　河姥之を　慕ひ、
うろこ　輝く　腕に　卷きぬ。
石は　泣く泣く　羽がひ　折りて、
水に　投ぐれば、右の　羽根は

瀬をば　のぼりて　鯉と　浮び、
折れし　左は　鱒と　下だり、
落つる　なみだは　一つ　毎に
ちさき　尾ひれの　數を　產みつ。
年に　いち度は、眷屬　すべて
こゝに　過ぎ行く　世をぞ　のろふ。
秋の　月夜を　深く　覺めて、
聽けよ、宿世の『われ』や　如何に。

十八　熱き眞砂

熱き　眞砂　の　上を　撫でゝ、
われは　獨り　し　物を　思へば、
遠き　深み　の　波浪は　打ちて、
手なる　下より　ひゞき來たる。
おのが　小胸　も　爲めに　振ひ、
千々　の　亂れ　は　濱　の　小砂利。

なれよ、小砂利よ、ひろき　海　に
幾代　打たれて、斯くや　置き。
なれを　讀みつゝ　ひろひ行けば、
ひとつ　びとつ　に　光　添へて、
經にし代　を　こそ　われに　語れ。

あはれ、海邊　の　熱き　砂利、よ、
此世　は　萬年　永く　繼げば、
われも、いまし　の　年　に　添はん。

十九　酒興

注げや、わが愛、今一ちよくを。
明日は酒興の來べきを知らず。
ふたりこの日を、手に手を取りて、
こゝに歡樂滿つれば滿つる。
誰れか酒の香あましといふや、
なれがいろ香も褪す時あるを。
さなり、けふのみ、たゞこの刹那、

われは心に自由を得たり。
天を呼ぶ君、地を擊つわが身、
しばし短きいのちに醉はん。
明日は、醒むれば、またこの愛の
おなじ味はひ得べしや。君よ、
時劫、見えざる鎖を曳いて、
われは悲哀に繫がる身なり。

二十　悲哀の俘

酒に向へど憂愁は去らず、
取れる盃なみだを湛ふ。
こゝに醉へるはわが肉のみぞ、
いづこ如何なる心の糧よ——
遠き奥よりかなしみ曳いて、
君よ、わが身は悲哀の俘。
失せし戀となかまへて問ひそ、

胸の苦悶を刻むは久し。
この世なつかし、この世は憎し、
これやわれのみ醒めたるこゝろ。
いづれ亡ぶるこの胸、この身、
私慾私憤に敵あるべしや——
遠き奥よりかなしみ曳いて、
君よ、わが身は悲哀の俘。

二十一　苦悶の鎖

（故野口寧齋君に）

ああ、君、苦悶を いだいて 逝きぬ、
わが身は なほ そを 胸にし 生くる。
生くると 死ぬるは、例へば 影の
その身に 添へると 添はぬに 似たり。
父母より 受けたる この世の もだえ、
一息 毎にも いのちを 刻み、
その音 天地の 間に 落ちて、

久遠の さゞ波 その輪を ひろぐ。
ああ、君、その輪の ひろがる なべに、
底なき 記憶の 淵にや 沈む。
わが手を 延ばして 救ふと すれば、
殘るは まぼろし ——
延び行く その端、君、今 陰府に、
苦悶の 鎖。
われ 他の端 をば こなたに 握る。

叙事
小曲

脱營兵

はしがき

先に同じ學窓に學び、後に同じ藝術に從事すれども、生と其方面を異にして、專ら音樂に熱心なる北村季晴君よ。生はこの叙事小曲を君に獻す。わが國現今の狀態に在りては、その作曲並に演出の上より、直に歐西の歌劇又は音樂劇の如きものを望むの到底不可能なることは、君も平生之を口にするところ。之に志あるものは、先づ、詩樂共に、易きより始めざるべからず。この曲、また、僅かに中幕物に價するもの、且、唱歌者の勞を省く爲め、普通のせりふを加へ、また、叙事の文句をも入れたり。舞臺にのぼる唱歌者の稀なる今日のことなれば、男聲女聲の獨唱も、長きところは、機に應じて、その中間の一部を叙事の文句と同じく、樂座の合唱となして可也。願くば君、之を嘉納せんことを。

明治三十八年五月

著者識。

脫營兵

（本舞臺、中央にアーチ形を構へ、その内は凡て凄愴たる墓場、月夜の景。下手、アーチ形の側に、樂座の設けあるべし。）

樂座（合唱）

小夜吹く　嵐も　ねむり　に　入りて、
奈落の　孤寂　を　招く頃、

並み立つ　石塔　荒れにし　庭を
照らす　は　月かげ　――　人の影。

（脱營兵、おづおづ登場。）

脱營兵（獨白）

ああ、營所をこゝまで逃げては來たが、心はわしといふ身體を逃げることは出來ない。――今日、國元から手紙が來て、開けて見れば、女房が二人の兒を遺して死んでしまつたと――その上、永年世話になつた、義

理ある母の大病。二人の兒はどうして居る。村のものと云つては、いづれも、揃ひも揃つて薄情な人ばかり。不斷から、わしの家を穢多同樣に取り扱ひ、――とても、世話を見て呉れやう筈はなし。――これは、御國の爲めには惡い事と知つては居るが、兎や角の心配から、透を見て、營所を逃げて來たものゝ――あとはわしが自訴して出るとも、また、百萬の軍隊でも出來ない奇功を、わし一人でやつて死なうとも、それは

わしの決心一つにあるのだ。――ああ、それにしても、胸がどきまぎして、もう、今から地獄にでも落ちて居る心持がする。この物凄い墓場は、たゞ無言で、わしを笑つて居るやうだ。もう、かうなつては、頼るものは神、佛、ばかり。――どうか、神さま、佛さま、暫くわたしが自由を許して下さりませ。お袋の樣子さへ見て、安心が出來ますれば、この身體は粉末微塵になつてもよろしうムい升。頼み升、頼み升。――

ああ、何だか胸が苦しい。――そはさうれと、この邊に尋ねて來た墓のある筈。――おお、之が女房の埋つて居るところか。――――お民、もう、會ふことは出來ないのか。子供を殘して死んだ上に、今、お袋の大病。わしは御國へ對して濟まぬことだが、營所を逃げて、こゝまで歸つて來たわい。情けないことになつて呉れたなア。――おお、向ふから來るは何者。――

樂座(合唱)
その影　あり　とは　知るや　否や、
足音　ぞ　ひそみて　進み來る——
罪ある者　をば　からめ取る　と、
惡魔　の　一隊　か、はた　追ひ手。

脫營兵(白)
やァ、こは不思議の怪物ども。——どこかに隱れて、やり過して呉れう。
(と、隱れ る。)

樂座(合唱)
死　を　さながらの　深き夜　に、
出で來たりけり　魔鬼　の　群——
これや　羅刹。
(どろ〳〵にて、覆面黑衣の怪物、數名登場。そのうちの頭領、運命神、奇なる杖を以て他を差圖し、脫營兵の隱れ居るを示めす。)

樂座合唱)
天網　のがれ難し、
運命、人　を　のろふ。

（脫營兵、恐れおのゝく。怪物、無言にて、之を引き出す。運命神の杖、鬼火を發す。渠、之を差し延ばして、その尖をまわせば、脫營兵くるくるまわる。）

運命神（獨唱）

影よ、影よ、
人は影なり。
闇を食ふ
人は影なり。
黑き杖の
ちから結びて、
われはこゝに
汝をのろはん。——
劫風、毒龍、ラルヒ。

（杖を以て印を結ぶ。）

樂座（合唱）

杖もて印を結べば、
先づ露兵現はる。

（露兵、二名現出。運命神、消ゆ。）

露兵一　やア、こは日本兵。

露兵二　何、日本兵が――

（兩兵、左右より脱營兵を蹴る。）

露兵一　われらは日本軍の爲めに殺され、遂に冥途へ送られたが、

露兵二　今、呼び戻されて、來て見れば、こゝに憎き日本の兵士。

露兵一　さいはひ、意氣地のない樣子――

露兵二　こゝが最も良い仕返し時――

一、二　綱を以てしばつてしまへ。

（脱營兵、縛せらる。）

樂座(合唱)
その　奇しき　綱　には、
千斤　の　魔力　あり。
その　重き　繩目　に、
人、手　さへ　すくみたり。

露兵一、二
えい。

(と、まづ倒す。)

樂座(合唱)
家なる　妻　には　會はで　別れ、
恩ある　老母　は　やまひ　篤し——
營所　を　のがれて　歸り來てし
心　は　さすがに　優しけれど、
あはれ、御空　を　落ちし　鳥、
胸　に　傷持つ　苦しさ　よ。

露兵一
何をもがくのだ。

露兵二
そこ動くな。
（と、また左右より蹴る。）

脱營兵
やア、默つて居れば兎や角と――目の黑い
間は、この身も日本帝國の軍人だぞ。

露兵一、二
何だ、この死にそこない奴が。
（また蹴る。）

脱營兵
ちェい。
（と、立ち行かんとすれば、身は後ろ手。どろ〳〵
にて、運命神、また現はれ、結べる印を解けば、露
兵消ゆ。これより段々、月光暗くなる。）

樂座（合唱）
本意なき　縄目　に　引き繋がれて、
ひそかに　ぬぐへる　涙　の　まなこ――

月さへ　曇りて　小暗き　この場、
ためらふ　前には　老母の　御かほ。

運命神(獨唱)
劫風、毒龍、ラルロ。
(また印を結べば、どろ〳〵にて、老母の幻影、現出運命神、消ゆ。)

脫營兵(白)
おお、母上——

老母幻影(獨唱)
あけ暮れ　鎭守の神に　詣で、
祈りし　願ひは　いまし　故ぞ。
わが身は　年波　安く　越えて、
この世を　今こそ　渡り來ぬれ。
先祖の　家の名　をば
かまへて　穢す勿れ。

脫營兵(白)
それでは、母上は、もう、あの世へ——申し、申し、母上——
(どろ〳〵にて、運命神、また現はる。)

運命神(獨唱)
ラルロ。

樂座(合唱)
見る見る　變りて、妻の　すがた。
(どろ〳〵にて、老母の幻影、妻の姿となる。運命神、消ゆ。)

脫營兵(獨唱)
おお、お民か　――　子等を　如何に。

妻の幻影(獨唱)
朝ゆふ　食事の　席に　坐はり、
いのりし　言葉は　君が　爲めの
二人の　子等をば　夜る　の　火かげ、
寂しき　孤獨を　まもりたり。
御國の　爲めに　盡し、
功蹟を　示めし　給へ。

脫營兵(獨唱)
さはれ、二人の　子等は　如何に。

樂座（合唱）

ああ、わが妻よと近づけば、
また現はれし運命神。

（どろ〳〵にて、運命神、現出。妻の幻影、あとずさりして、消ゆ。）

運命神（獨唱）

天網のがれ難し、
運命、なれをのろふ。

（神、また杖をまわせば、脫營兵、くるくまわる。月光、明くなる。）

脫營兵（獨唱）

あはれ、老いたる母に別れ、
なほも妻にはあざけらるゝ。
今朝のたよりを受けずあらば、
もとの心は續くべきを——！
敵は滿洲にあらず、
妻子ぞほだし。——
あはれ、如何なる天魔入りて、
斯くやわが身を迷はしむる。

運命神(獨唱)

そこに　無言の　教へ　あり、
そこに　無形の　つるぎ　あり。
切れや、こゝろを　繋ぐ　綱を。
解けや、その胸　照らす　文字を。

脫營兵(獨唱)

われは　營所を　のがれ來たり、
ああ、神にも、佛にも、
この胸、この身は、見捨てられしか。

樂座(合唱)

解けや、その胸　照らす　文字を。
切れや、心を　繋ぐ　綱を。

脫營兵(獨唱)

この胸――この綱――この身――この手。

(怪物、すべて出で來たり、脫營兵の上にうち群がり、運命神の杖につれて大くまわる。大どろ〳〵にて、舞臺を眞暗にし、更らに營所の門前を現はす。)

番兵（獨白）

今のは夢であつたか。――けふ來た手紙を心配して、ついうと〳〵したのであつたか。――こんな弱いことでは駄目だなァ。

樂座（合唱）

身をもて國を讓る、
死すともおそるべしや。

（夜中行軍の一隊、號令に從つて歸り來たる。
番兵、直立、之を迎ふ。喇叭の音にて幕。）

泡鳴詩集　終

泡鳴著作目錄

魂迷月中刄　（悲劇）
明治二十七年十二月、女學雜誌社發行。

嘉播の親　（物語詩）
明治三十二年、雜誌『學窓餘談』連載。

露じも　（詩集）
菊半裁、貳百貳拾六頁。明治三十四年七月出版。

夕潮　（詩集）
四六版、百六拾頁。明治三十七年十月、日高有倫堂發行。

悲戀悲歌（詩集）
四六版、百七拾六頁。明治三十八年六月、日高有倫堂發行。

海堡技師（詩劇）
四六版、百八拾五頁。明治三十八年十月、金尾文淵堂發行。

神秘的半獸主義（論文）
菊版、貳百四頁。明治三十九年六月、左久良書房發行。

泡鳴詩集（夕潮、悲戀悲歌合本）
四六版、參百參拾六頁。明治三十九年七月、金尾文淵堂發行。

黃金鱗（詩集）
闇中海歌（詩集）
近刊

明治三十九年十一月二十日印刷
明治三十九年十一月廿五日發行

泡鳴詩集
金二十錢

不許複製

著作者　岩野保衛
發行者　東京市京橋區五郎兵衛町廿二番地　金尾種次郎
印刷者　東京市京橋區築地二丁目二十番地　河本龜之助
印刷所　東京市京橋區築地二丁目廿一番地　株式會社國光社

發兌元　東京市京橋區五郎兵衛町　金尾文淵堂
發賣元　大阪市東區南渡邊町　杉本書店

文淵堂發兌圖書發賣元

東京市神田區表神保町　東京堂書店
東京市神田區裏神保町　上田屋書店
東京市京橋區尾張町二丁目　東海堂書店
東京市日本橋區吳服町　北隆館書店
東京市京橋區中橋廣小路六番地　前川文榮閣
大阪市東區南渡邊町　杉本書店
久留米市米屋町　菊竹金文堂
名古屋市宮町一丁目　星野文星堂

明治三十九年十一月改正

東京　金尾文淵堂書店

藏版圖書一覽

宗教書類

綱島梁川 **病間錄** (三版) 金壹圓 小包料拾錢

中村春雨 **新約物語** (再版) 金壹圓 小包料拾錢

同 **舊約物語** (近刊) 金壹圓五十錢 小包料十五錢

中村春雨解說 松井昇畫解 **キリスト物語** (新刊) 金拾錢 郵稅二錢

海老名彈正 **靈海新潮** (新刊) 金八拾錢 郵稅八錢

清澤滿之 **懺悔錄** (新刊) 金七拾錢 郵稅八錢

浩々洞同人 **沈思錄** (近刊)

吉水智海 **支那佛教史** (新刊) 上製六十錢 並製四十五錢 小包料十錢

雜書類

五十嵐力 **兒童の研究** (新刊) 金壹圓 小包料拾錢

山路愛山 **社會主義管見** (新刊) 金三十錢 郵稅六錢

子規自筆 **俳人芭蕉** (木版) 金壹圓 小包料拾錢

蕪村自筆 **俳諧三十六歌仙** (木版) 金壹圓 小包料拾錢

淺倉無聲 **日本小說年表** (新刊) 金壹圓 小包料拾錢

安部磯雄 **理想の人** (新刊) 金七拾錢 郵稅八錢

浩々歌客 **鷗心錄** (近刊)

小說書類

菊池幽芳	妙な男	(二冊)	各金六十錢 郵税各八錢
同	七日間	(切賣)	
同	秘中の秘	(近刊)	
中村春雨	密航婦	(新刊)	金七十錢 郵税八錢
同	無花果	(十版)	金七十錢 郵税八錢
同	雛鳩	(切賣)	
同	犯さぬ罪	(近刊)	
同	炬火	(近刊)	

小說書類

木下尙江	火の柱	(十三版)	金參拾五錢 郵税六錢
同	良人の白	(參冊)	各三十五錢 郵税各六錢
同	良人の自白續篇	(新刊)	金五十五錢 郵税八錢
須藤南翠	間一髪	(新刊)	金七十五錢 郵税八錢
柳川春葉	緣の糸	(新刊)	金六十錢 郵税八錢
大倉桃郎	琵琶歌	(四版)	金六十錢 郵税八錢
同	舊山河	(新刊)	金六十錢 郵税八錢
佐野天聲	露の曲	(新刊)	金六十錢 郵税八錢

小説書類

巖谷小波	喜劇七草（新刊）	金八十錢 郵税八錢
佐野天聲 脚本	不死の誓（近刊）	

詩文畫集類

薄田泣菫	白羊宮（新刊）	金壹圓 小包料拾錢
同	暮笛集（三版）	金六十錢 郵税六錢
同	白玉姫（新刊）	金八十錢 郵税八錢
同	子守唄（近刊）	
與謝野鐵幹	むらさき（品切）	
與謝野鐵幹 同晶子	毒艸（四版）	金六拾錢 郵税八錢
與謝野晶子	夢の華（新刊）	金八十錢 郵税六錢
同	みだれ髪（品切）	

詩文畫集類

與謝野晶子	小扇（四版）	金三十五錢	郵税四錢
與謝野晶子・山川登美子・増田雅子	戀ごろも（三版）	金四十錢	郵税四錢
ミラー野口米次郎	劍と戀の日本（切品）		
高安月郊	寢覺草（新刊）	金六十錢	郵税八錢
河井醉茗	塔影（新刊）	金四十五錢	郵税六錢
鳥居君子	上總のやどり（新刊）	金二十錢	郵税四錢
卅八年度白馬會紀念畫集（新刊）		金九十錢	郵税不要
小林萬吾	風景水彩畫帖（新刊）	金五十錢	郵税不要

月刊書類

島村抱月主幹	早稻田文學	毎月一回一日	一冊金二十錢 郵税一錢五厘
丸山晩霞主幹	水彩畫講義錄	毎月一回十五日	會費一ヶ月六十錢

早稻田文學

編輯所　東京牛込區藥王寺前町廿番地　早稻田文學社
東京牛込區中町三十五番地　文藝協會事務所
○毎月一回二日發行一冊廿錢郵稅一錢半
○一年前金二圓四十錢（郵稅不要）

一本誌は元坪内逍遙氏主幹の下に七年間文壇の重鎭たりしもの、一旦休刊の後明治三十九年一月新なる希望と抱負とを以て再興せられたるものなり。

一本誌は文學、美術、演藝、宗教、哲學、史傳、風俗、各方面の評論及び小說、詩歌、脚本等の創作、飜譯を文壇の新舊諸派にわたりて、選拔採錄すると共に、毎號卷頭には數十頁の長論說若しくは創作飜譯等の完結せるものを載せ、是而已にても優に一冊の著書たるに足るの面目を具へしむ。

一本誌の彙報欄は文藝敎育諸方面の現狀を彙集し評拆して精博公平穩健を旨とし文壇の趨勢をして一睟の間に去來せしむ、是れ本誌の擅場なり。

一本誌現在の主幹者は島村抱月氏なり。

一本誌は文藝協會と聯合し之が機關として文藝の實際方面に活動する外、採錄する所の文章には何等の偏したる標準をも挾むことなし。

發兌元　東京市京橋區五郎兵衞町二十二番地　金尾文淵堂

[illegible]